アンケート回答集計

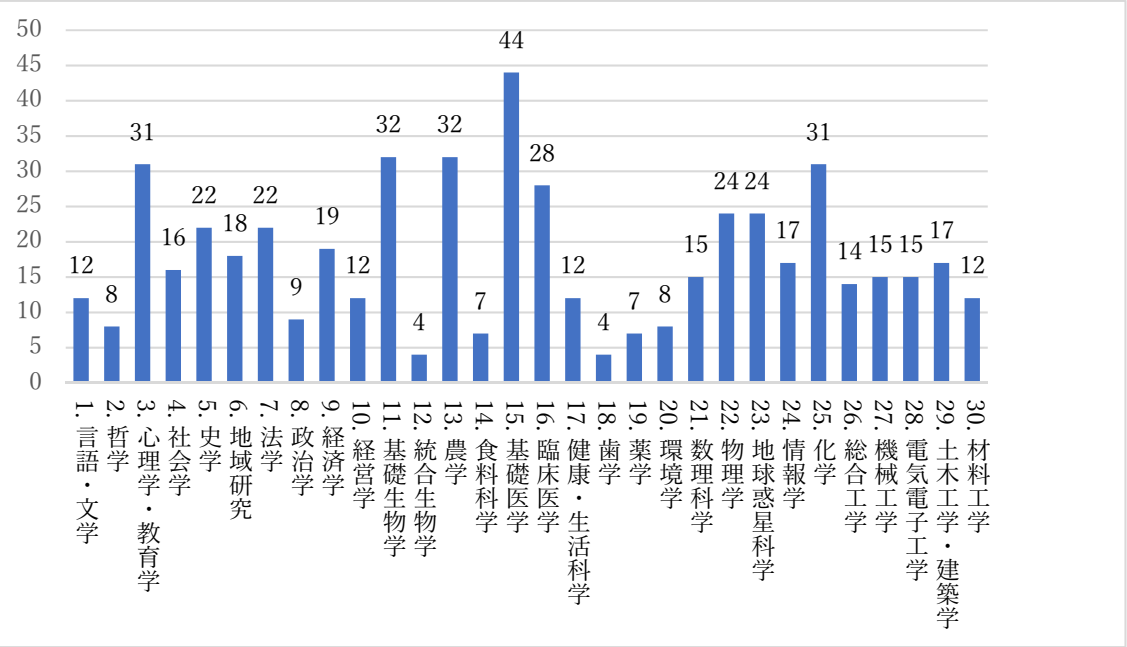
1. 調査の概要

調査名称	査読制度に関するアンケート調査
調査実施時期	2023 年 5 月 2 日～同 23 日
調査実施主体	科学者委員会学術体制分科会 論文査読の意義及び課題に関する検討小委員会
調査対象	すべての日本学術会議会員及び連携会員
調査方法	オンライン
有効回答数	531 件

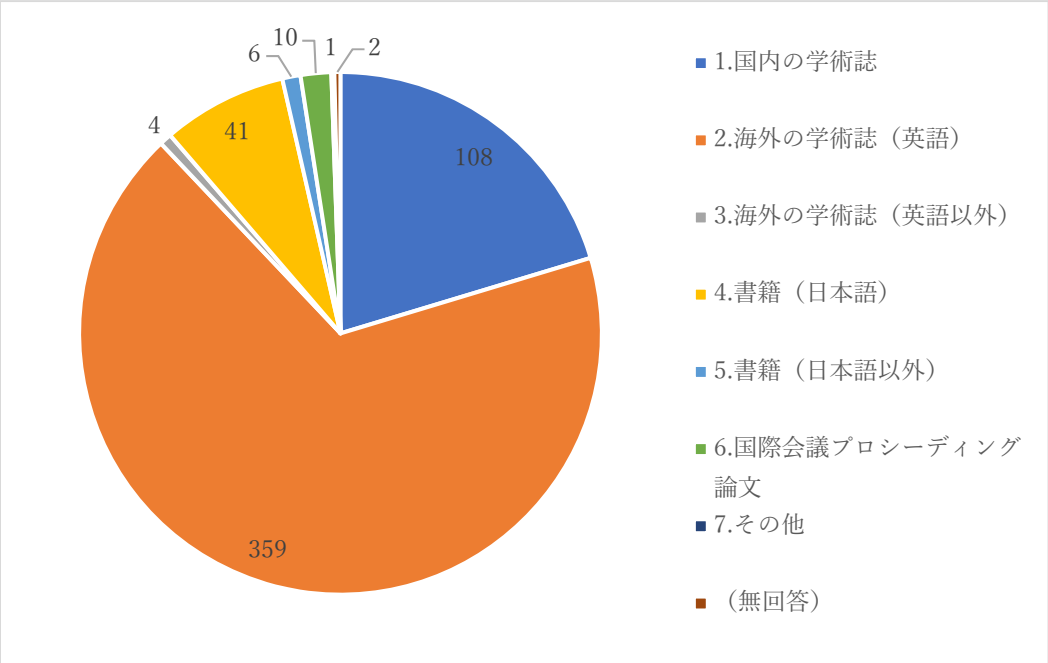
本アンケート調査では、回答者が日本学術会議会員・連携会員であることを確認するため、回答者の氏名、所属、メールアドレスの記載を求めた。本アンケートへの回答 532 件のうち、氏名等の記載がなかった 1 件を無効回答とし、531 件の結果について集計を行った。なお、設問により回答対象者が異なるため、それぞれの設問の回答対象者数を記載した。

2. 回答集計

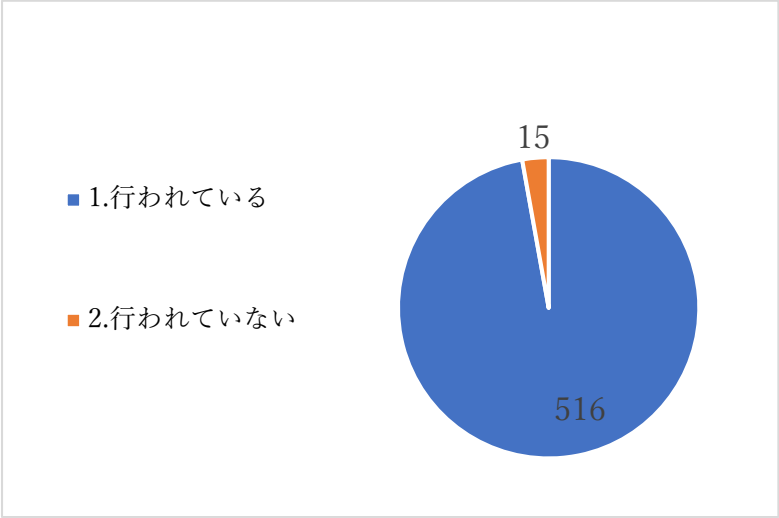
問1.　あなたの主な研究分野はどれですか。複数の研究分野にまたがる研究を実施している場合は、研究手法等の面で最も該当すると思われるものを１つ回答ください。(回答対象者：531 名)



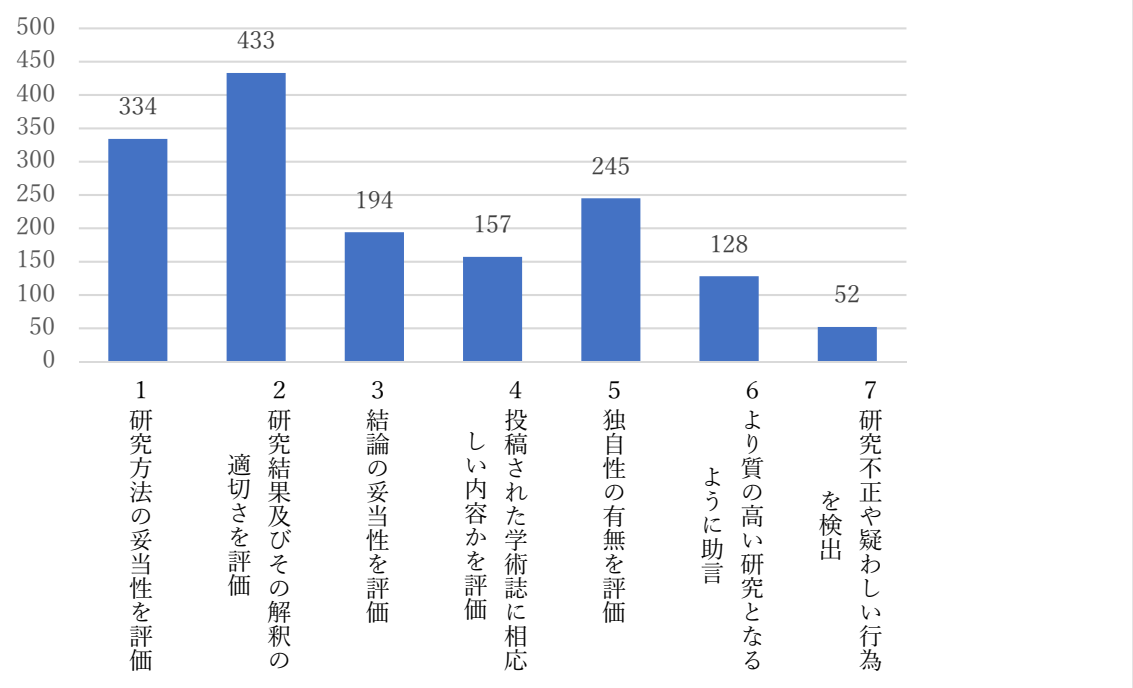
問2.　あなたが研究成果を最終的に発表する際に利用する主な媒体はどれですか。(回答対象者：531 名)



問3.　あなたの研究分野では、査読が一般的に行われていますか。（回答対象者：531 名）

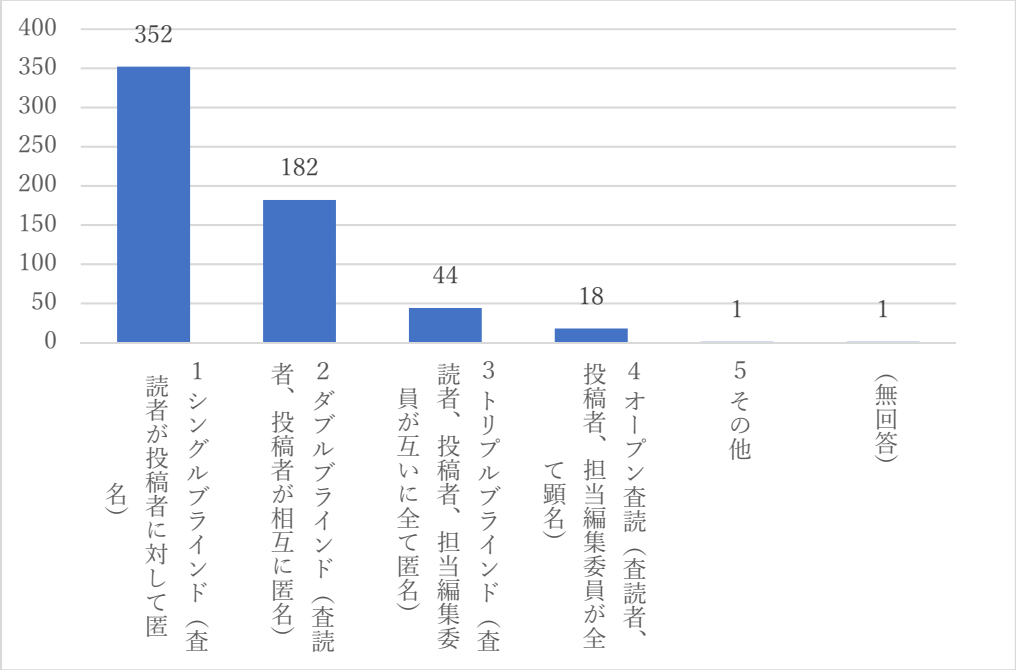


問4.　査読に求められる役割として、最も重要だと考えるものを、【上位３つまで】選んでください。（回答対象者：516 名）

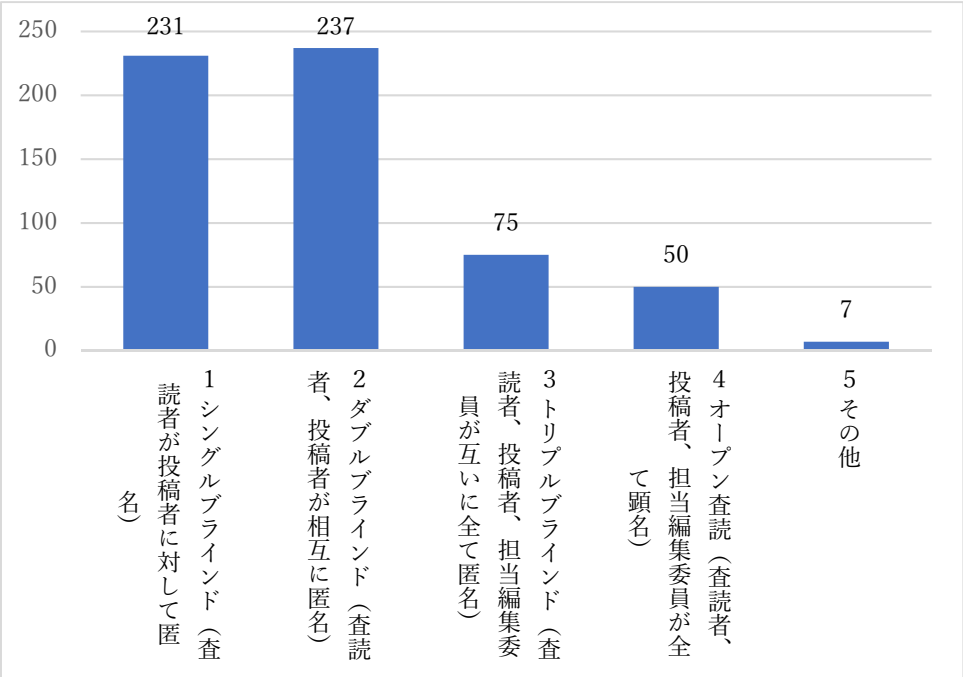


※「３つまで」とあるが，４つ以上の回答が５件あり（最大７つ）

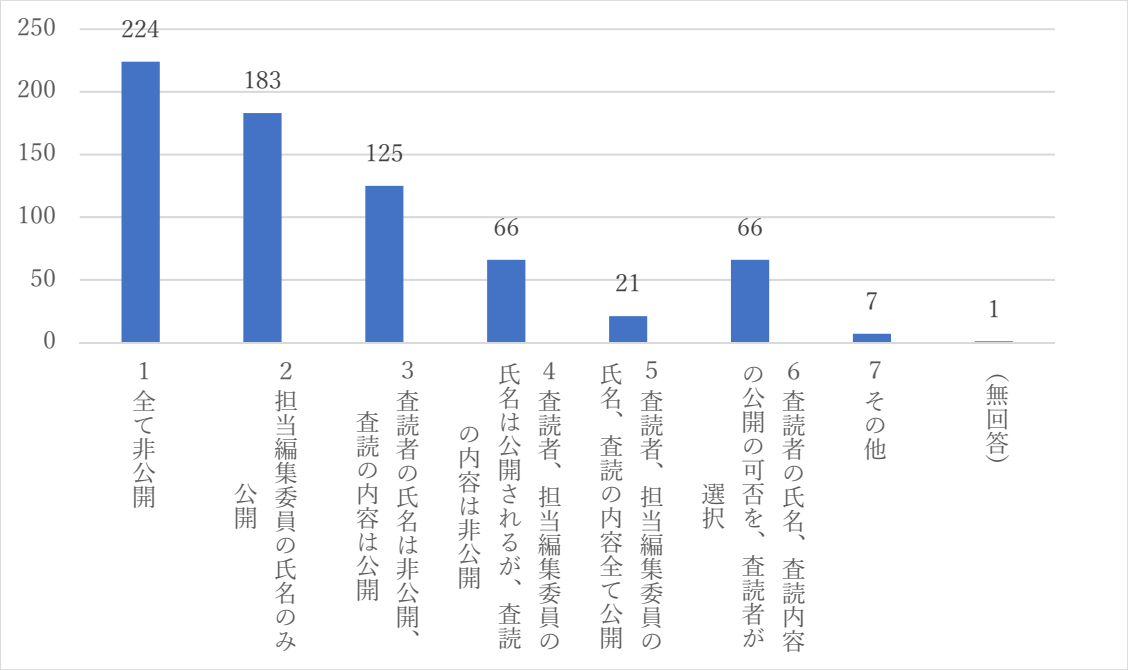
問5.　あなたの研究分野で、現在、査読の方法として一般的なものはどれですか。（複数回答可）（回答対象者：516 名）



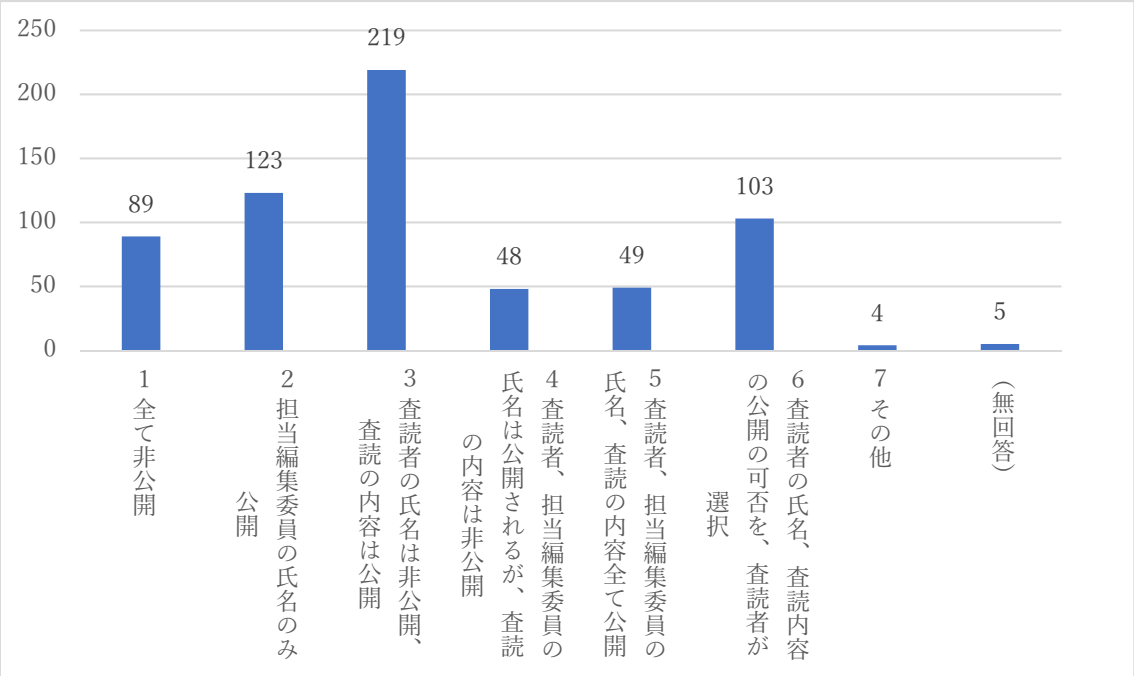
問6.　あなたの研究分野では、査読の方法としてどの方法が望ましいと思いますか。現在の方法が望ましいと考える場合は、前問と同じものを選んでください。（複数回答可）（回答対象者：516 名）



問7.　あなたの研究分野では、投稿論文の採択後に、査読のプロセスは可視化されていますか。（複数回答可）（回答対象者：516 名）

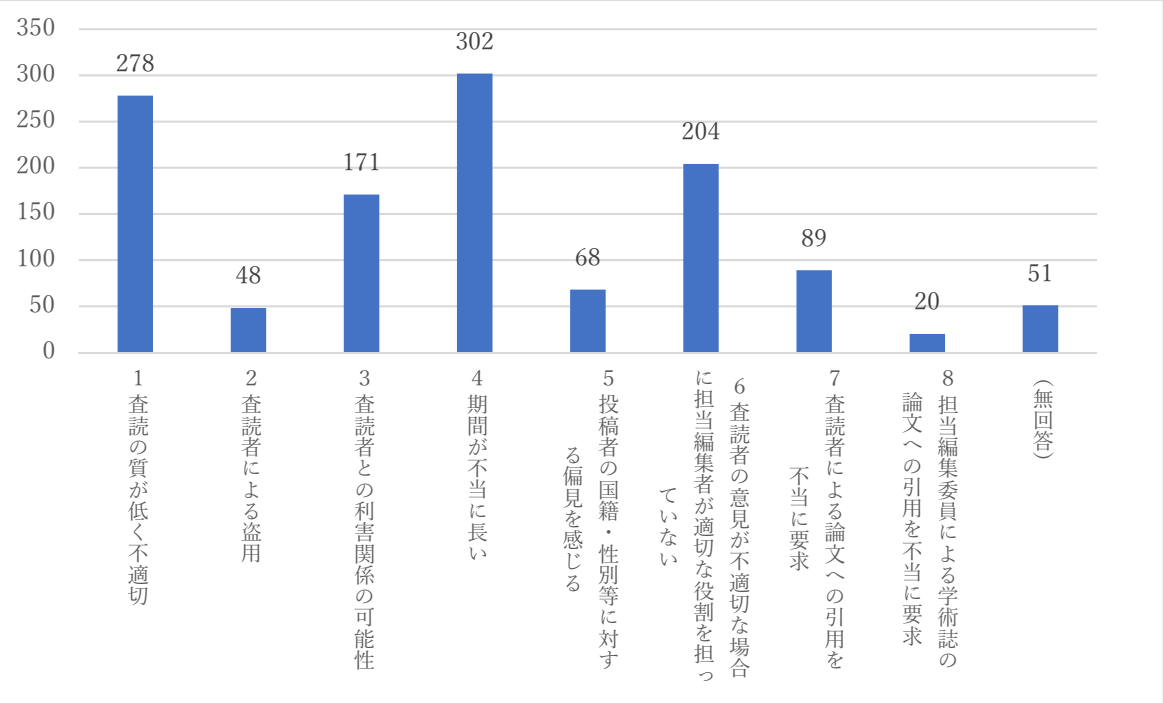


問8.　あなたは、投稿論文の採択後の査読プロセスの可視化について、どうすることが望ましいと思いますか。（複数回答可）（回答対象者：516 名）

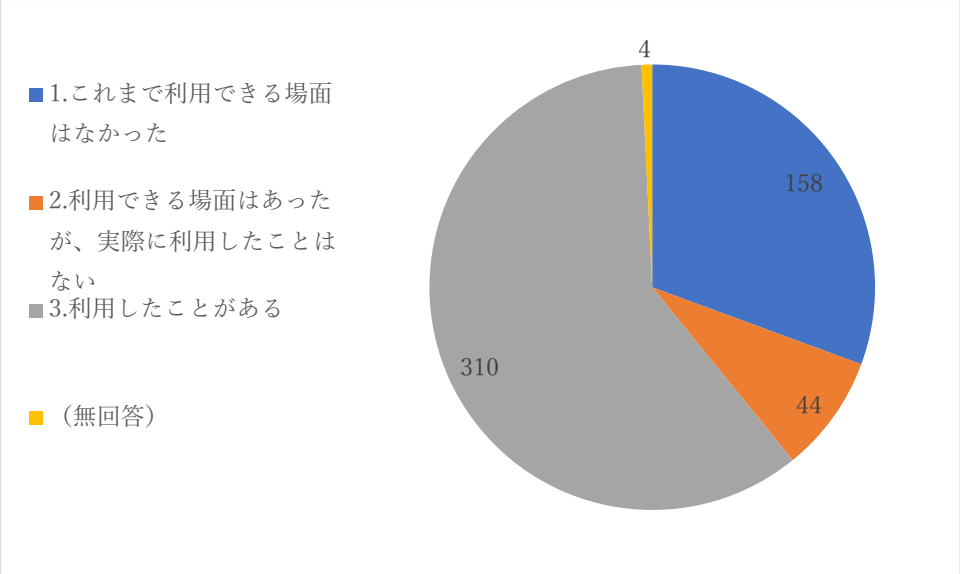


【学術論文を投稿する際の査読に関する事柄について】

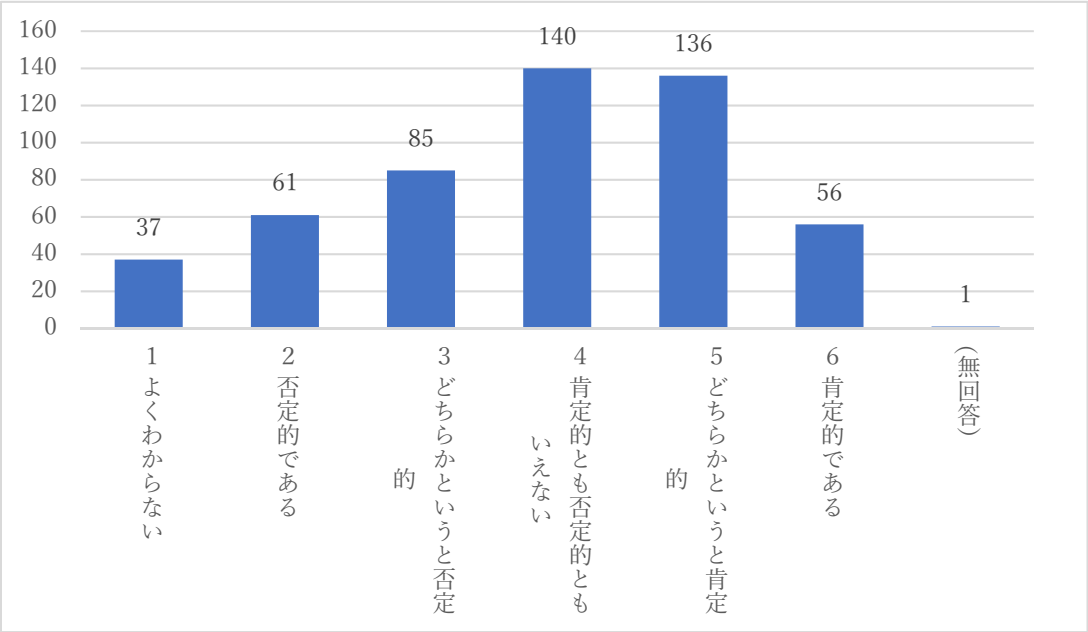
問9.　投稿者として、査読に関連してこれまでどのような問題を経験したことがありますか。（複数回答可）（回答対象者：516 名）



問10.　あなたは、投稿者が査読者を推薦する制度を、投稿者として利用したことがありますか。（回答対象者：516 名）

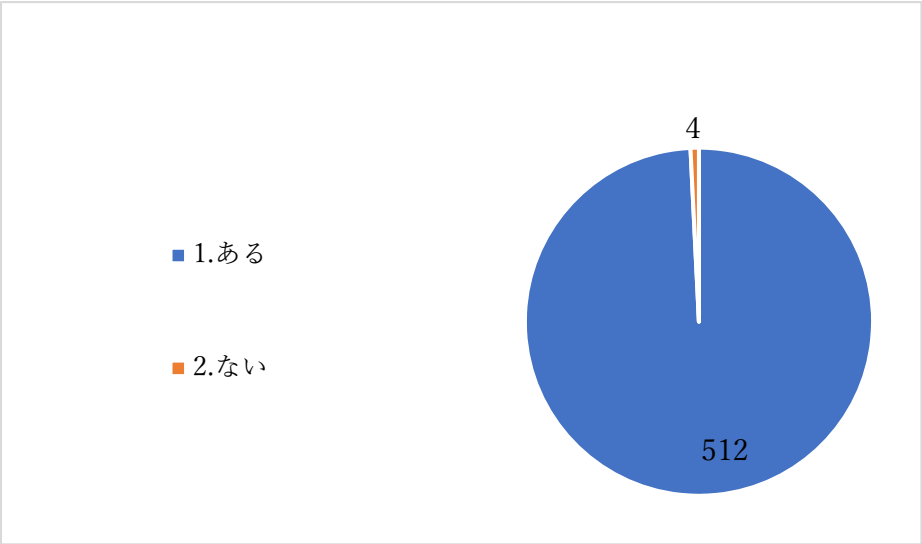


問11.　査読者の推薦制度について、あなたの考えに最も近いものを選んでください。（回答対象者：516 名）

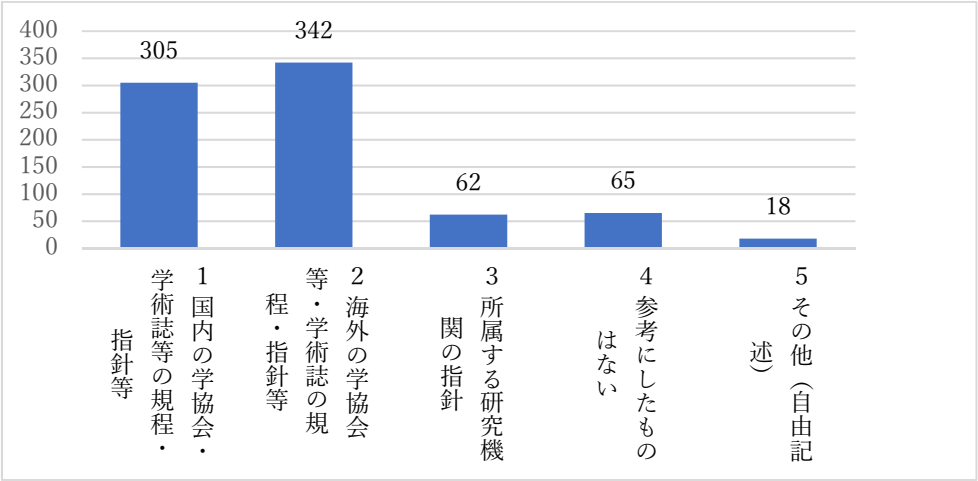


【査読者として学術論文を査読する際の事柄について】

問12.　査読者としての経験をお持ちですか。（回答対象者：516 名）



問13.　査読を行う際に、これまで参考にした規程・指針等はありますか。(複数回答可)(回答対象者：512 名)



※回答中に 1（国内学協会）・2（海外学協会）のいずれかを含む：425 件

問13.　査読を行う際に、これまで参考にした規程・指針等はありますか。：その他（自由記述）

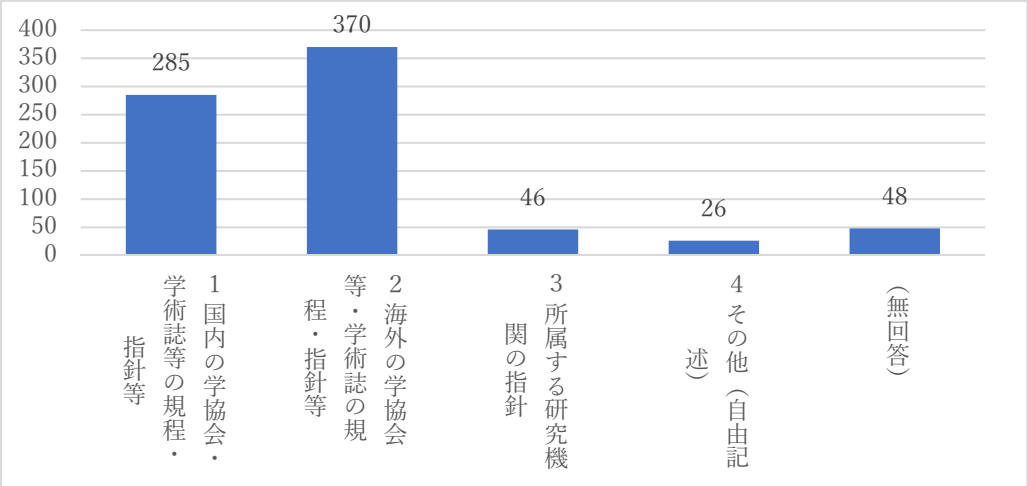
- 建設的な意見を提案せず reject だけを通知するような不適切な査読者を排除する仕組みを雑誌側が規定しなければならない。
- 自分が受けた査読結果と同様の感覚で査読を行っている
- 投稿されている雑誌の規定に原則的に従っている
- web ページや書籍で査読に関して論じたものがあるので、そういうのを読んだ
- 査読の際にそれぞれの雑誌で規定・指針を確認するように指示される
- 国外 peer review 制の雑誌では、Instruction for reviewers があるのが普通と思います。
- 査読経験の豊富な先輩の助言
- 査読は勉強になるが、1 年に数件の査読をすることもあり、大変な労力を払うことになる。査読に対する何らかのインセンティブがあればと感じている。
- 院生のときに指導教員の査読を手伝ったことが参考になった
- 先行研究をきちんと網羅しているのか、これまで行われた議論を把握して理論展開を行っているのかを重視する。
- 査読方法等について書かれた書籍
- 学術誌が提示する査読の指針。
- かつての指導教官や尊敬している先輩研究者らの指針や考え方など
- シニア研究者のアドバイス
- 英文論文の書き方の本（日本語）に執筆方法とともに，査読者のあるべき姿の説明が

あった．　つまり，内容を審査するという事に加えて，著者に協力してより良い論文にすることに協力するという立場が書かれていた．

- 国際学会の Journal Editor を経験し、就任に当っては、担当弁護士から、編集委員、査読委員の義務と責任を明確に告げられた。自分を信じて正直であれば、責任を問われることはない。
- どのジャーナルでも基本的に同じだと思いますので、文書でいろいろかいてあっても関係なく査読しています。判断の根拠になること、どこを改訂すべきかなどがわかりやすく書かれていることが最も重要と思います。
- 先輩や先生から査読のやり方について聞いたこと
- 一般財団法人　公正研究推進協会＜https://edu.aprin.or.jp/＞　が提供している eAPRIN 教材の中の「ピア・レビュー」の項目
- できるだけサイエンスのレベルアップになるようなオリジナルな論文投稿をしていきたいし、また査読する側も同様の立場を保っていきたい。
- 論文査読は基本的にボランティア活動と認識しているが、特定の研究者に査読負荷が偏ること、産業界からの査読者を確保することが容易ではないことから、学術的な意義だけでなく産業的価値の評価が得られにくい。
- 不当に長い査読が繰り返されたあとに不採用となり（投稿後　1 年）、競争相手の論文が採用されて「世界で初めて」とマスコミで話題となった。投稿者が申告すれば査読者と査読の経緯が公開される仕組みが必要である。
- 学術誌を発行している学会の規定・指針を参考にしています．

※「その他（自由記述）」を選択していない回答者 5 名の回答を含む。

問14.　査読を行う際に、有益だと思う規程・指針等はありますか。このようなものがあれば有益だと思うものも含めて選択してください。(複数回答可)（回答対象者：512 名）



※回答中に 1（国内学協会）・2（海外学協会）のいずれかを含む：434 件

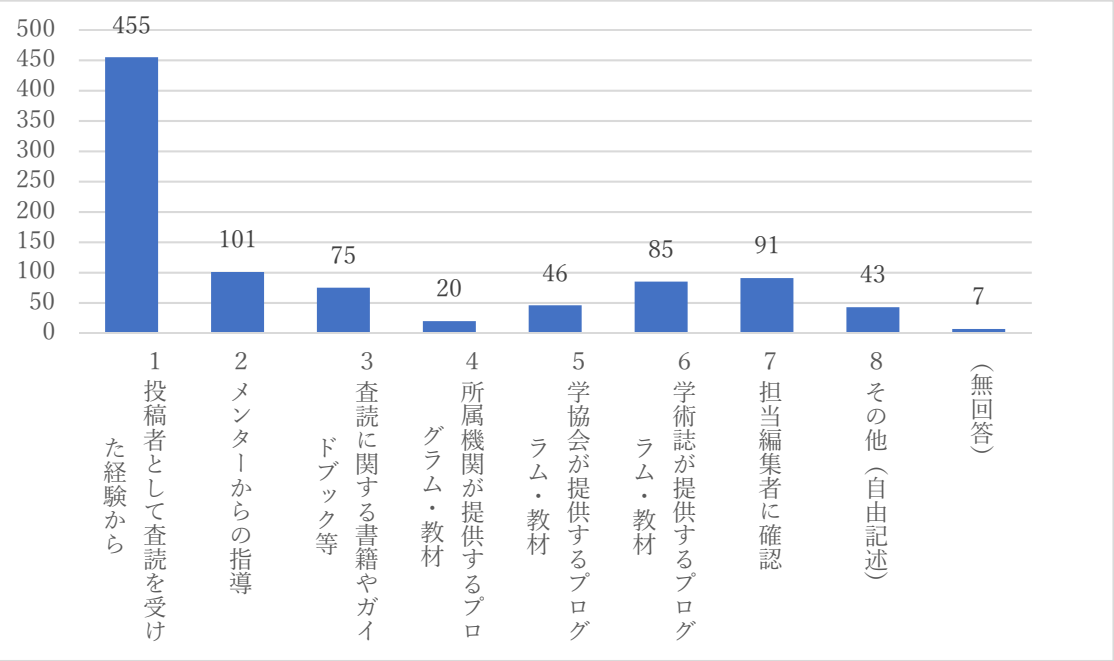
問 14.　査読を行う際に、有益だと思う規程・指針等はありますか。：その他（自由記述）

- 自分が受けた査読結果
- 利益相反
- https://www.aeaweb.org/articles?id=10.1257/jep.31.1.231　の記事
- しかるべき機関の示す査読についての国際標準を示す指針・規程
- 査読の方針についてあまりはっきりしたことは書かれてないことが多いので、査読者自身で判断する必要もあるが、個人レベルの意見でも参考になる。
- 著名な海外ジャーナルで査読を経験した研究者、投稿者双方の意見が有益でした。
- 一部の研究機関が行なっている一方的な predatory journal 認定には、一部行き過ぎがあるのではと考える。真面目に運営されている雑誌が、同じ会社が出版している他の雑誌と一括で認定される例も。
- 誰でもわかっているような基本的なことしか必要でないので，規程，指針等は別に必要ないし，あっても無益である．
- 特に有益と思う規定はない。いずれも常識的。各学術誌は、その学術誌の分野内でのランキングを考慮して独自の審査基準を明示すべき。査読内容が過剰に厳しいケースが最近多いと感じる。
- 論文誌ごとに規定が異なるので。
- 学術誌が提示する査読の指針。eLife 誌の指針は特に有用であった。
- シニア研究者のアドバイス
- 査読の心得の様なものはあると有益かもしれない．以前，研究倫理に関するパンフレットが出版されたことがある．それに似たものが良いと思う．良い論文にすることに著者に協力するという事を記載する．
- 自身の論文に対する査読を受けた経験
- 質問の意味がよくわからない。　有益だと思う規定や指針は、国内外の学協会・学術誌の査読に関する規定・指針の中に、当然たくさんある。
- 専攻分野では、査読の規程・指針で公になったものを知らない。規定はなじまないと思うが、指針を設けて公表することは検討すべきだと考える。
- 学会等で査読指針が作成されていない。
- 査読に関するトラブル事例集があると有益だと思う。規定・指針などは、通り一遍のきれいごとしか書けないので、あまり意味がないと思う。
- 学術会議などで作成する。
- 先達に聞くのは効果的
- 当該学術分野における有用性や新規性を見極めることが重要なので，査読に関わる規程や指針よりも，査読者の選定に関わる規程や指針が必要と考える．
- ジャーナルにより採択基準に関するポリシーがあるため、ジャーナル毎に指針は異なる。統一的な基本は、倫理観ぐらいかと思われる。

- COPE
- 一般財団法人　公正研究推進協会＜https://edu.aprin.or.jp/＞　が提供しているeAPRIN 教材の中の「ピア・レビュー」の項目
- 査読者が投稿者と利害関係になるかどうかを査読者が宣言することを求める場合があるが、その客観的な裏付けが容易でない。
- 特に有益と感じたことはない。
- 各雑誌のポリシーがあれば示してもらえばよいが、特別なポリシーがなければ不要。
- 特になし（3 件）

※「その他（自由記述）」を選択していない回答者 4 名の回答を含む。

問15.　査読の方法や気をつけるべき点等について、これまでどのようにして習得しましたか。（複数回答可）（回答対象者：512 名）



問 15.　査読の方法や気をつけるべき点等について、これまでどのようにして習得しましたか。：その他（自由記述）

- トレーニングコースがあればよいと思います。
- 個々の論文の採否に向けたプロセスについて、編集委員会における具体的な議論のなかで学んだ。
- 学術雑誌の査読についてのガイドラインで学んだ

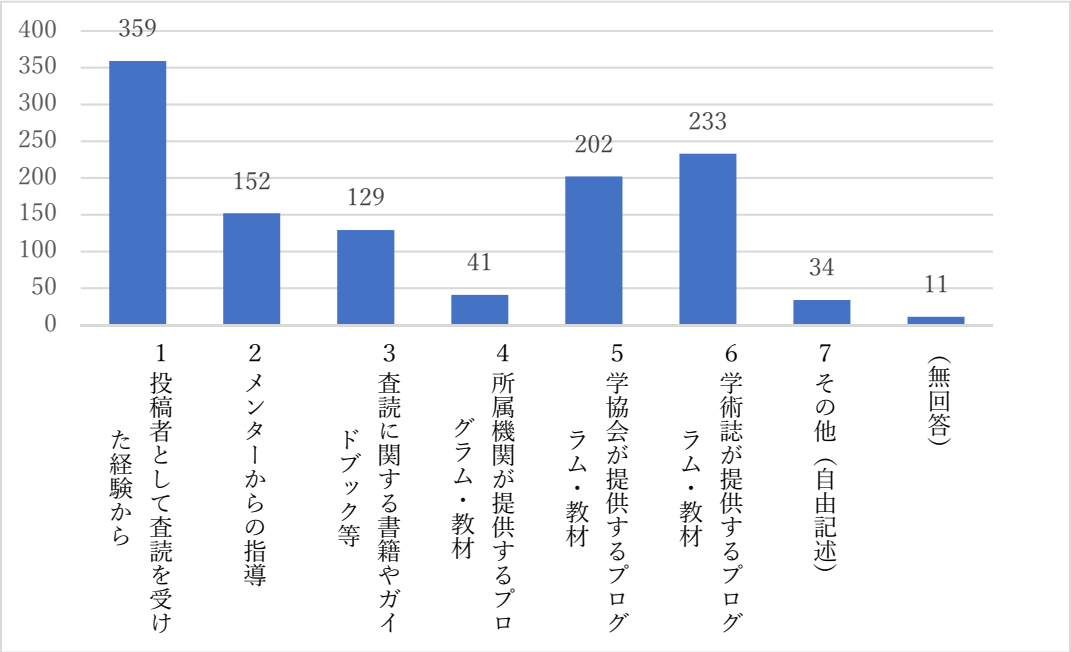
- 学術誌が査読について規定している方針に沿って査読をすることが多いが、上記の選択肢にはそれがない（教材でもプログラムでもない）
- 問１４　自由解答欄をご覧ください。→「著名な海外ジャーナルで査読を経験した研究者、投稿者双方の意見が有益でした。」
- 目指していた海外雑誌に自身が投稿したときに受けた査読のうち建設的であったものが一番みならうべきものとして勉強になる。
- 研究者仲間（研究会等）での意見交換
- メインの学会では、編集委員になると担当した論文以外の査読結果と評価を知ることができたのでそこで OJT のように学んだ。
- 特になし。（何からも習得していない）強いて言えば、投稿者としての自身の査読を受けた経験から
- 「学術発表」というものが人間社会においてどのような意味を持つのかという根本的な問いに対する答えを考えずに、あるべき査読の方向性を見出すのは不可能。
- これまでの研究者としての全ての経験から学び取ったアカデミックライティングとして到達すべき指標をもとに査読を行う。
- 編集委員としての経験から学んだ
- 編集委員として経験を積んだ
- 同じ論文に対する他の査読者の査読から学んだ
- 学会や研究会での質疑応答からも学んだ。
- 学際的な研究をしており多様な分野の雑誌から査読依頼を受けるが、分野によって慣習や留意すべきポイントが異なると思われるので、可能ならその分野での編集者経験のある人などから話を聞くようにしている
- 研究論文発表は，実験結果等の真理追究に資するというのが目的であり，それにそって考えた
- 定形的なプログラムや教材は存在せず、メンター制度もなく、教員や先輩の何気ない話、査読委員を継続する中で経験知のような形で習得した。
- ファインマンの著書で、科学者は誠実でなければならないというエッセイ。
- 国内外の学協会・学術誌による査読に関する規定・指針等から学んだ。
- 当該分野の主要国際会議では、reviewer と area chair（メタ査読者）に対して、詳細なガイドラインが準備されており非常に参考になる。
- 査読を担当する編集委員会全体で議論することで（投稿者名は当然匿名）、査読における留意点や評価書の書き方を習得した。
- 基本的には研究者として常識である。さらに、学会の校閲運営委員会などで学習する。
- 所属機関や学協会の査読をしながら経験的に学んだ。
- 自身の編集委員経験から学んだ。

- 自分が編集委員や編集委員長になると、どういう査読がジャーナルにとって大事かはよく理解できます。多くの研究者が編集委員を経験するのが望ましいと思います。
- 所属する学会の編集委員会における協議を通して学び，その学会の査読規程や査読のガイドラインを作成した。投稿者として査読者から受けた経験の大半は，反面教師であり，それを改革した。
- 基本的に学問の自由、言論の自由が保障されるべきで、査読者の主義主張や考え方を著者に押し付けてはならないと思う。学会員はその学会の学会誌に研究成果を発表する権利があり、それは尊重されるべきだと思う。
- 所属する学会の編集委員会に担当編集委員として参加し，他の担当編集委の活動や査読者の査読結果を見たりしたこと，実際にどのような問題が生じうるかを経験したことが学びの基となっている
- 編集委員や編集責任者を経験したことからも学んだ。
- 投稿者としての経験のあと、査読者、担当編集委員、編集長の任にあたるなかで、査読の方法や注意点について認識が深まった。
- 編集委員として参加している研究者との議論が役に立った。
- 経験者同士で経験を情報共有する
- 査読者として，他の査読者のコメントを見ることができる場合があり，参考になる
- 学んだことはない
- 方法や気を付けるべき点について特に何か（誰か）から学んだことはありませんが、研究者としての倫理に基づいて結果を出すよう努力しています。
- 一般財団法人　公正研究推進協会＜https://www.aprin.or.jp/＞　が提供しているeAPRIN 教材の中の「ピア・レビュー」の項目
- 博士課程のカリキュラムに査読レポートの書き方があった。
- 学会誌編集委員として、多くの査読を差配した経験から
- MDPI 系は、査読に寄与した研究者あるいはランクの高い大学からの論文掲載料を安くするという仕組みで IF を上げている。査読の甘い OA 誌の IF が高く、お金がある研究者の質の低い論文が採択されている。
- 査読依頼状に査読のポイント、各項目に対する評価点を記載するように指示されているので、それに従った。
- 学会員同士や先輩研究者などとの情報交換や研鑽
- 複数の査読者がいる場合、他者の内容から学んだ。
- 学会内での議論・意見交換
- 所属する研究機関の査読に関する指針を適用した。
- 私の関係する分野では、若手研究者も査読をすることがあるが、査読能力に欠ける場合がある。きちっとしたメンターによる指導は必要だと思う。
- 査読者として学んだ

・　学会誌の編集委員として関与する過程で学んだ ・　同じ論文を審査した他の査読者の査読結果から、良い面、悪い面、両方を学んだ

※「その他（自由記述）」を選択していない回答者 6 名の回答を含む。

問16.　査読の方法や気をつけるべき点などに習得するうえで、有益だと思う方法を回答してください。このようなものがあれば有益だと思うものも含めて選択してください。（複数回答可）（回答対象者：512 名）



問 16.　査読の方法や気をつけるべき点などに習得するうえで、有益だと思う方法を回答してください。：その他（自由記述）

・　学協会の編集委員会が制定している査読要領 ・　しかるべき機関の示す査読についての国際標準を示す指針・規程 ・　編集委員会など、採否について議論する現場で学べることが多く、常に学ぶ姿勢を持つことが重要。 ・　査読に関する意見交換の場を設ける。 ・　各学術誌は各々の学術誌の難易度を考慮した審査基準を審査員に明示すべき。 ・　文化人類学会では査読制度について話し合い、より親切な査読にむけてチェックリストを作成中。委員を務める 5 つの海外雑誌でも、非英語圏に向けて査読制度を改革中。話し合いは極めて重要。

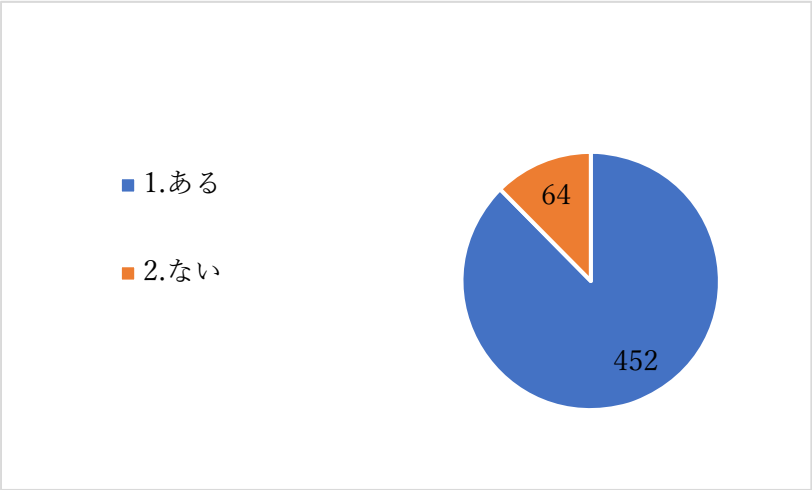
- 研究者仲間（研究会等）での意見交換
- 学術雑誌というものの存在意義について深く思索することが有用。
- 学会や研究会での質疑応答から学ぶ。日頃から実験技術の詳細を学ぶ。最新の学術情報を論文や国際学会への参加によって学ぶ。
- 共著論文を執筆する際，研究者同士で意義や方法等に関して情報交換を行う.
- 国内外の学協会・学術誌による査読に関する規定・指針等から学ぶ。
- 査読方針は国際会議、学術誌ごとに異なるため、それぞれで詳しいガイドラインを準備するのが望ましい。
- 学会の校閲運営委員会などで学習する。
- 査読媒体の編集と連絡をとりあう
- 自身が編集委員となったつもりで、論文採択の責任を負っているつもりで査読をすることが重要
- 分野による特色もあるので、関係する学協会、学術誌が提供するプログラム・教材で学ぶのが良いと思う。これに対して、所属機関は、研究者のモラル一般（データの改ざん、捏造、査読など）として指導するのが良い。
- 編集委員会の優れた編集委員や査読委員から学ぶことが有益である。しかし，好ましくない査読から学ぶ人が存在することが課題である。
- 学会というコミュニティを基盤とした活動が最も望ましいと考える.
- 査読にはかなりの労力を割かなければならないが、研究業績としてはまったく評価されない。査読を研究活動として評価するシステムが必要と考える。
- 経験者同士で経験を情報共有する
- 科学を育む査読の技法 水島昇著 羊土社
- メンターと共同で査読を行う経験を積む（許可を得た上で）
- 分野や学会のレベルによってかなり異なるので一般的なプログラムや教材ではあまり通用しないと思う。
- 一般財団法人　公正研究推進協会＜https://www.aprin.or.jp//＞　が提供しているeAPRIN 教材の中の「ピア・レビュー」の項目
- 査読者養成プログラム的なものを国が要求しているのかもしれませんが，ガイドラインや教材に従おうとするあまり画一的な評価になったり，逆に査読者の責任逃れに使われることを危惧しております。
- 日本語の場合はオーソドックスなフリースタイルの査読から、完全にやり取りが電子化され、テキスト部分がかなり少なくなるものまで、多様である。英語の場合は相当形式化が進んでいる。テキスト部分が少ない。
- 利益相反のある査読の疑いについて、指摘があれば、査読の経緯を公開する仕組みが必要である。
- 学術誌によって査読のポイントが異なると思うので、その指示に従うのが良いと思

う。

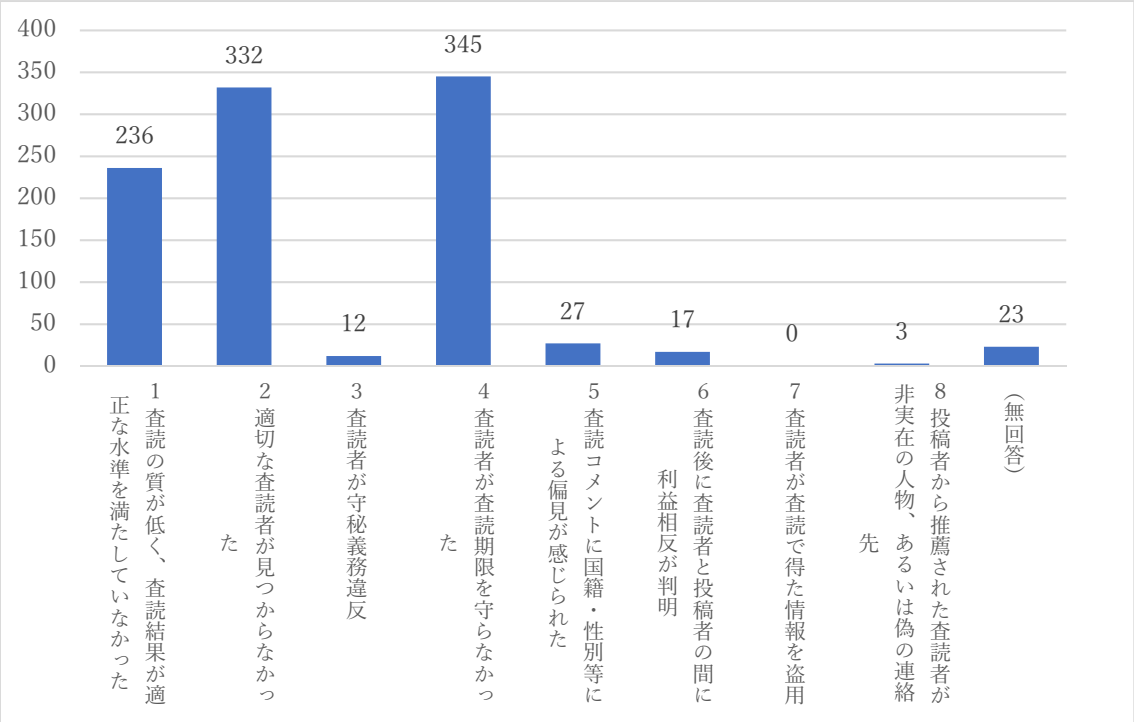
- 同じ学会でも、研究テーマや研究手法が異なると、査読方針も大幅に変わる（所属学会には、自然科学系から社会科学系まで含む）。研究者が幅広い研究への理解を深める場や機会がもっと必要。
- 経験の共有
- 所属する研究機関の査読に関する指針を参照する。
- 査読は誤謬チェックなどミニマムの品質確保に徹すべき。査読が新たな分野開拓や新たなアプローチを阻害してはならない。研究の価値評価は査読ではなく、社会が事後的に判断すべきことがら。
- 一般的なガイドブックや所属機関のプログラムは導入としてはよいかもしれないが、分野や雑誌によって求められる査読方法が違うので、同じ分野のメンターからケースバイケースでアドバイスをもらうのが現実的。
- 同じ論文を審査する他の査読者の査読結果から学ぶ

【学術誌の編集委員・編集者として学術誌を編集する際の事柄について】

問17.　編集委員・編集者としての経験をお持ちですか。（回答対象者：516 名）



問18.　あなたは編集委員・編集者として、これまで査読に関連してどのような問題を経験したことがありますか。（複数回答可）（回答対象者：452 名）



問19.　査読に関して、これまで経験した問題事例があれば、公表して差し支えのない範囲で記述してください。

- 剽窃箇所がある論文があった
- 査読者がすべて合格を出しているのに、最終段階で編集者が掲載することができないという判断をした（国際誌）。関連学会の幹部まで巻き込み、最終的には掲載された。
- 初回以降に書き直しを複数回求められ、投稿者がギブアップしてしまった。
- 論文が増えていることにより，査読依頼も増えており，査読依頼を行なっても約７割から断られる．査読者を見つけるのが，日増しに困難になってきている．２名の査読者を探すのに１５名ほどにコンタクトしたこともある．
- 特段のことはなかったが、編集者としての立場の場合においては、査読者の意見が分かれた場合には、さらに査読者を増やして意見を求めたことが多かった。
- 査読者の質が悪く、間違った評価をしているので、査読者と議論したいとの申し出が投稿者よりあった。査読者を匿名にすることでそれを認めた。
- 編集委員長として不採択とした論文の執筆者から、脅迫まがいのメールを複数回受け取った。「不適切な査読者に査読されたために不採択となった。その論文が不採択となったことにより自分の人生が狂わされた。編集委員長として道義的責任を取れ」という内容の手紙やメールを、編集委員長の任期が終わって 10 年以上経った時期に同一人物から数回受け取った。「規定に則った手順で査読を行った」ことを繰り返し説明したが、納得して貰えず、一時は身の危険すら感じた。
- 編集委員として、類似する論文（非コード RNA による制御に関するもので、分子は異なるが実験内容がほぼ同じ）が大量に投稿されることを経験した。中国のペーパーミルによるものと思われる。
- かなり以前（およそ 30 年前）のことであるが、当該研究分野で査読制度が十分に定着しておらず、査読者が査読対象論文の著者に直接問いただすという問題が生じたことがある。同じ頃、論文投稿者（当該分野における著名人）に査読にまわすことを告げたところ、「わたしの論文を審査するというのか！」という怒りの反応があったことがある。この投稿者はその後、投稿を取り下げた。
- いまだに査読業務が電子化されていない組織・団体があること。これは大変に不便です。
- 明らかにデータがおかしい投稿原稿にたまに遭遇する。
- 二重投稿の疑いがあった。
- 既に回答しているが、査読結果が来るまでの時間が異常に長い、コメント（の一部）に不適切なものがある
- よくある話ですが、査読者が論文の内容をうまく理解できていないのに不適切な理由で不採択の判定をしてくることは時々あります。編集委員会でうまく処理できる

場合もありますが、うまく処理できない場合もあり、困難さを感じます。

- 特にないが、近年編集者によるデスクリジェクションが増え、研究の Visibility を事前に高めることのできる有力大学や欧米以外の大学に所属する研究者にとって不利となっている。また欧米の大学の基準で判断され、日本の研究が評価されにくくなっている。
- 査読 1 回目で Major revision であり、修正後、2 回目の査読で Minor revision の判定となり、軽微な修正の後、再提出したが、その結果は、Reject となった。これは明らかに編集委員のミスであるが、意義を申し立てても受け付けられなかった。このような例は多数ある。
- 一時査読の後、著者がその査読意見を参考に修整した論文が他紙に投稿され、掲載された。
- 査読意見が変遷して、一貫していなかったり、論点がすり替えられるなどの、非論理的な査読者とのやり取りにフラストレーションを感じたことがある。
- 査読の結果、掲載が認められなかった投稿者から、査読結果に対して合理的ではないクレームが出され、対応に苦慮したことがある。
- 同じ内容の論文が複数の国際誌に投稿され、いずれの論文も査読を担当することになったため、同時投稿の事実が明らかになった。
- データのあら探しのような査読を受けたことがあり，はじめから受理するつもりがないのではと感じた。審査員の要求した実験や訂正などすべて行い revise したにも関わらず全く当初指摘されていない理由で却下された。若いときに審査に回ったあげくに、データは重要そうだが英語がひどいため内容がよくわからないと言う審査理由で却下されたことがある（その間に競争相手に先を越された)。Native の同業者に英語を直してもらったのに poor English と書かれた。担当編集委員と同じ考えの査読者に審査されて公平な審査を受けられなかった(否定的なコメントばかりで自分たちの仕事を引用して書き直すようにリクエストされた)。編集委員も査読に加わって同様のリクエストを行った(編集委員は査読をまとめる立場では？)。
- 新しい知見は判断に困るらしく，たらいまわしにされて，結局リジェクトされたことがある。
- 査読が研究指導の場になってしまうような事例があったので、いつまで、どの程度、査読を行うかについて、学会内でのコンセンサスが必要である。
- 査読者が、これまでの投稿論文の学会報告記録を削除するよう事実上依頼してきたこと。
- 編集者には内密に、部下に査読をさせることが常態化している研究者がいた。
- associate editor（編集者からアサインされて，具体的な査読者を決める役割）の査読者選定に不明瞭な点があった。 / Editor-in-Chief（編集長）が査読に関する筆者からのクレームを上手く対応できなかった。

- 私がチーフエディターをしているジャーナルで，査読者がアクセプトの後で，勝手に出版社に連絡を取って，我々の知らないうちに著者に加わっていたケースがあった．この件は後で発覚して，論文は撤回になった．
- 査読者が見つからない。査読者が期限を守らない。一度引き受けた査読を辞退する査読者がいる。査読が論理性・公平性・建設性を欠いており役に立たない。改訂のたびに新たな批判を追加し、査読が収束しない。
- 二重投稿や盗用
- ノーベル賞受賞者の公表している論文内容と異なる結果を含む論文が、ことごとく不採択と、過剰な長期間審査を余儀なく受け、論文受理まで 2 年半を要した経験がある。明らかにバイアスがかかっており、こんなことであれば国内の学術誌にサッと論文を通したほうが良かったのではないかと後悔した。
- 捏造データ、二重投稿の査読をした経験があります。捏造は、データの取り直しやデータの矛盾を指摘したときに発覚したことがあります。二重投稿は、handling editor として担当していたときに、レフェリーから指摘を受けました。
- 自分が Reviewer のうちの一人で、Reject の返事だったのに、Editor の判断で受理に至ってしまった。自分が Reviewer で、捏造疑いの図があって指摘したが、Editor からの返事がなくその後どうなったのかわからない。
- 明かに中身を読んでいない、一般的な意見（例、根拠を示さず「この研究の新規制はない」と結論。若しくは supporting information ファイルに詳細に書かれているのにそれを見ていないコメント。
- この雑誌に掲載できる論文はなくなってしまうのではないか，と思えるほど，要求水準が高い査読結果がくることがある。
- 複数の査読付き論文誌からの依頼が重複して特定の研究者の元に集まる等，査読の負担に偏りがある
- ひょんなことから 2 重投稿である事を見つけた（数回）
- 査読が完全のボランティアでなされていることが多く、それが査読者のインセンティブを下げていること。
- 英文による査読結果の英語に間違いが多く差し戻しせざるを得なかった。
- すでに発表した論文であるかどうかの判断が難しいケースがあった。査読者が自説を押し売りするようなコメントをするケースは時々見られるが、専門的見地からのコメントと区別がつきにくく修正が難しい。
- 同じ投稿者が、ほぼ論文を修正しないまま何度も投稿したり、質の低い論文を続けて投稿するなどがある。これは、大学院の教育体制の弱体化に起因していると推測している。
- 具体的に知っているわけではないが、知人間で論文を採択しあっていることが疑われる場合がある。知人の多い人は論文が採択されやすい。

- 二重投稿などの不正投稿があった。
- 所謂「ハゲタカジャーナル」を含め、雑誌が多くなり過ぎて査読依頼が多く対応仕切れない。
- 自身の査読行動の過ちですが、リジェクトの決断ができず、追加実験提案をしてしまい、それが現実的には実施されず、堂々巡りに陥ってしまったことがありました。
- 査読者が見つからない
- 自説にこだわり他説を否定する査読。通説と異なる論を全否定する査読。
- 評価が割れたときには困りました。また、掲載しないという判断をした査読者に対して、再査読をお願いするかどうかは難しい問題だと思います。
- 推薦された査読者（複数名全員）と投稿者が裏で通じていて、査読者全員が一言一句違わない肯定的で簡潔な査読意見を返してきた。
- 自分自身が査読者の一方であり、高得点をつけたものが、編集委員会の判断で不可となり、その理由が示された際に、あまりに編集委員会が当該分野における知識を持っていないことが明らかになったに身も関わらず、投稿者本人からも私自身からも査読者の査読結果を開示するよう求めたがなされなかった。
- 査読者の適切な選択が投稿対象としての雑誌の価値を決めると考えている。
- 原稿を全く読んだ形跡がないのに、そのまま掲載可(Accept as it is)と回答した査読者がいた。
- 著者が査読結果を受けて論文の改訂版を再投稿し、それをもとの査読者に閲読してもらったが、いつまでたっても閲読結果が返ってこなかった。別の査読者に回すこともできず、何ケ月も動けなくて困った。
- 設問として何を問題としているかがわからない。Rebuttal を受けることは多い。ジャーナルのランクにより問題が変わってくるともいえるので、一概に答えられない。
- 査読者の査読結果提出が不応に遅延した。一度目のリバイスで指摘しなかった点を二回目にメージャーリビジョンになり結果リジェクトされた。査読者が他の査読者のコメントに対する返答を（当該査読者が OK と言っているの）不当に批判した。
- やはり期限を守って頂けないことが多いです。
- 引用文献が日本からの引用がほとんどなく類似のものがあっても無視されている場合が結構多い。中国からの投稿論文では中国からの論文の引用が最近多くなってきている。
- 投稿論文が設定する研究課題と方法の妥当性を評価するのではなく、査読者が妥当だと考える研究課題と方法を示してそれに従って改稿するよう求める査読レポートが書かれた
- コメント内容から、本来なら査読を引き受けるべきでないと思われる人が査読し、査読らしかぬ重箱のすみをつつくような批判的コメントをし続ける。
- 査読者間で意見が割れた場合の対応。

- 査読回数に制限が設けられていない場合に、査読者からの指摘が繰り返されることによって審査期間が長引くとともに、投稿論文の文字数が定められた上限を大幅に超えてしまい、最終的に不採択となった事例があった。担当編集委員が適切に介入すべきであったと考えられるが、この事例では投稿者が学会および編集委員会を提訴するなど非常に大きな問題となった。
- 1. 査読者から投稿論文の内容とは必ずしも直接関係のない査読者が関連する複数の論文の引用を指示された。　2. プロフェッショナルに依頼し英文校正を行ったにも関わらず、繰り返し英文校正を指示された。
- 査読を受ける側の経験としては、プラスになったことも多いが、不適切な査読だったことも少なくない。いちばんひどかったのは明らかに本文を読んでおらず、見当違いの意見をされたことである。 / 査読をする側の経験としては、やはり負担感が大きい。執筆者のプラスになるようなコメントを心がけているが、相応の時間と手間を取られ、正直に言ってあまり担当したくない仕事である。
- 投稿者が不採択になった論文に対し、次回の投稿に備えて編集委員会のメンバーと直接議論する機会を設けて欲しいという依頼をうけたことがある。編集委員会としての匿名性の観点から、それに応じることはできないという回答をし、納得してもらったという経験がある。
- 査読するまでもなく編集者の判断で reject すべき質の低い論文を査読依頼すること。
- 巧妙な剽窃
- 査読者が、最初の査読の際には指摘しなかった事項について、再投稿された論文の再査読の際に、「新たな指摘」として、追加の指摘をすることがままあった。また、「論文の質を上げるため」ということで、論文の採択には必要のないコメントをすることがある。自らの見解と異なった結果、解釈がある際に、否定的なコメントをする。
- 査読者が、客観性・公平性に欠ける意見に固執して、編集に滞りが生じた。 / 著者が、査読者による合理的な指摘に対して、求められた応答を拒んで、編集に滞りが生じた。
- 多数の執筆者が記されオーサーシップが明確でなかった。引用文献で必ずしも引用の必要性が感じられない投稿者の人脈と思われる人の文献を引用していた。
- プログラム委員長を務めた国際会議において、ある査読者が担当論文をそのままコピーし別の会議に投稿する事案が発生した。また、arXiv などのプレプリントからアイデアを盗まれたという申し出が複数あった。
- 掲載不可とした理由を説明しても，著者が納得しなかった。
- 査読が厳しすぎて学会誌に掲載される本数が極度に少なくなることがあり、委員長から「なるべく通す、そのために教育的コメントも必要」という方向性が示されたことがあった。同じ学会の中だと競争原理が働くので、同業者として通したくないと

いう意識をもつ査読者がいると感じた。

- 以前、大学院生と思われる査読者に自分の論文が査読されたが、あまりにもレベルが低く、まったく的外れな査読内容が返ってきた。「中国は人口が 14 億人いるのに、なぜサンプル数はそんなに小さいのか（サンプル計算された数を示していた）」など、質が低く研究を理解していない質問が繰り返された。
- 採否を、一人一票という形で、十分議論せず査読者の多数決で決定する方式に疑問を覚えた。
- 適切な査読者が見つからない場合、査読の質を担保するのに苦労した。複数の分野の異なる査読者の組み合わせをつくることになる。査読者データプールは特に国際雑誌で行われているが、閲読作業が特定の個人に集中する傾向にある。従来のままの査読システム維持が人材不足で困難になるかもしれない。
- 1. ダブルブラインドで執筆者名を隠した査読を経験したことがあるが、論文を読めば、引用文献や著者自身の過去のデータへの言及などから、どのグループであるかはわかってしまう。なので、ダブルブラインドの査読は意味がない。 / 2.バングラデシュとの共同研究を行っているが、筆頭著者も責任著者もバングラデシュだと、編集委員が中身もろくろく見ないで、査読に回すことなく、リジェクトすることが頻繁にある。翌日にリジェクトされたこともある。間違いなく内容を吟味していない。査読者にまで行けば、色々な意見は来るが、基本的に歓迎であり、今回のアンケートのような懸案事項は些末な問題だと感じる。
- 海外論文の査読では、査読文の英語表現力が重視される。稚拙な査読文は投稿者が不満を持つ。その意味で、日本人査読者の英語表現能力を向上させるべきだと思っている。自分の表現力不足を経験した。
- 二重投稿があり，論文掲載後に読者から指摘を受けて対応した。
- 査読に落ちた投稿者が学会名簿をみて（編集委員全体は公表されている）、夜半自宅に直接電話をかけて抗議してきた（私は担当していない）。直接の面識はなかったが、投稿者は年配の男性で、私はまだ若かった。年齢および性別へのヘイトを感じた。いずれにせよ、電話そのものに抗議し、編集委員長マターとした。投稿者の善性を前提にした査読制度は危険である。
- 最初に指摘できたはずの修正要求を 2 度目や 3 度目の査読の際になされた。過度の修正要求がなされ、研究成果の公表が遅れた。査読を引き受けると回答した人が、その後何度リマインドしても査読をせず、その論文の審査が遅れた。
- 査読者から投稿者が競争的研究者との国際会議におけるロビートーク時の 3 者会談の情報がもたらされ、意図的な論文無視がなされているという指摘を受け、投稿者に対して、修正不能 Reject との判定を下し、投稿者に連絡した。同時に、同じ分野の民間出版社のジャーナルエディターにもその旨を連絡し、エディター間討議を行なった。他誌に対する再投稿を防ぐ意味である。別ケースでは、大物研究者の学生論

文を Reject したところ、咲いてく結果への抗議文が全体の Editor-in－Chief に届けられ、エディター判断に対する弁明を要求された。投稿者の主張を再チェックし、それが嘘の主張であることを証明した。Editor 判断に納得しない場合は、上訴制度が確立されていることを実感した経験だった。

- 査読者として推薦した人から、不当な査読結果を送られたことがある。
- 海外の学術誌の編集委員をしていた際、日本に関する論文の査読を日本の研究者に依頼したがことごとく断られた。査読者を探すことができないため、編集委員を辞退した。
- 一番多いのは、適切な査読者がみつからないことです。最近は皆忙しいので査読をしてもらえなくなることが多いです。
- 専門外の論文の査読を依頼される場合がある。欧米が長期休暇に入る時期（夏季休暇やクリスマス休暇）に査読依頼が増加する傾向がある。
- 英語があまりにも下手で、かつイントロ、データの解釈、結論が論文の体をなしていないひどいものだったで、リジェクトして、教授に連絡したところ、学生が教授に内緒で投稿していたことが判明した。学生は、留学生で、論文がないと奨学金が打ち切りになるので、勝手に投稿したとのことでした。
- 査読期間を短くすることが至上命令のようになっている現状は論文内容の適切性を担保する弊害になっていると感ずることがあった。
- 「参考文献の件数が推奨数に満たない」として、必要性の低い文献まで引用することを求められたことがあった。
- 査読期限を大きく超過する査読者が存在し，そのことを許容する空気が学会内にあったため，編集委員会から厳しく催促したり，期限を守らない査読者のブラックリストを作って査読依頼をしないようにしたりした。それから，掲載不可とする理由が具体的でない，あるいは適切とは言い難い査読に対して，担当編集委員がそれを改めさせないという事象が何度かあり，編集委員長としてそれを覆せないというジレンマに遭遇した。すべての査読者が「掲載可」を出さないと，「掲載可」にしない担当編集委員が存在し，査読結果に対して担当編集委員としての判断を十分に行わない委員がいる。しかし，それらをすべて委員から外すと人材不足になるという問題があった。要するに，本当に優れた担当編集委員や査読者の絶対数が不足している。一番いけないのは，「優れた論文は誰が読んでも優れている」と考える人の存在だ。本当に優れている論文を見いだす編集委員が必要だ。
- 科学者が時間を研究に充分さけなくなっており、本人の論文の投稿は行うが、査読を積極的に行う、国内研究者が減っているように感じる。特に英文誌では顕著ではないか。
- 査読者が著者に対して誹謗中傷のような査読コメントを書いた。著者に知らせない前提のはずの編集委員宛のコメントを、編集委員がそのまま著者に開示してしまっ

た。既に日本語の雑誌に公表済みの論文を、業者に英訳させて英文誌に投稿した人がいた（この人については5年間投稿禁止の処分を行った)。その他にも二重投稿の例に数件遭遇した。

- 査読が完了してアクセプトを出したにもかかわらず、著者が校正段階で、目的や方法の変更を含む大幅な変更を申し出た。
- 査読者が上手く見つからない状況で，出来る限り効率的に査読を進めたいという思いと，公平公正な査読手続きを確実に踏むこととのバランスをとる必要があった（査読結果が割れたときの対応の取り方など).
- 査読を受ける側として記述：覆面査読者が、名前が分からない事を利用して、学会での役職のねたみか、その他の理由で、この時とばかりに、不当なコメント、判定、嫌がらせをして、正当でない判定をすることがあった。人間のさがが出る傾向がある。
- 覆面査読は自由に書ける事もあるが、マイナス面が多いと思われる。投稿者の名前を伏せても、内容、引用文献等々で判断がつく。特に小さい学会では当然であろう。また、覆面査読者に関しても、判断着く場合が多い。公表した状態での査読が良いと思われる。
- 論文の採択を強く推した編集委員が、投稿者の指導教員であった。
- 剽窃があったにも関わらず論文が採択された。
- 分析が明らかに誤りであった論文が採択され、学会で優秀論文として表彰された。
- 最近、査読コメントの作成に生成AIを用いていると疑われる事例がある。
- 掲載論文数を絞り、厳しい査読を行う学術誌では、落とされるケースが多くなり、結果、投稿者が減少する。また、選別の基準に疑念が生じやすい。一方、査読によって論文の質を向上されることを目的とし、できるだけ多くの論文を掲載する方針の学術誌では、前者に比べて玉石混交となる傾向がある。これらの間の価値観の相違も、若手の間に不満を引き起こす原因となる。
- 査読者間で研究不正の有無について見解の相違が生じた
- 対立する2つの欧米研究グループのうち一方と共同研究していたため、他方のグループに属する研究者から不当に否定的な査読を受けた。
- 対立する欧米研究グループの大物研究者から「我々の仲間になれば論文が通りやすくなるぞ」と、査読を取引条件とするような勧誘（脅し？）を受けたことがある。
- 編集者をしていた時、なかなか査読者が見つからず困った。査読者の枯渇は20年ほど前から始まっていた。査読依頼に対して返事をしてこない研究者もおり、次の査読者を探すべきかさえ判断できず、研究者としてのモラルを疑った。
- 近年は査読者枯渇の影響で、未熟なコメントが非常に多くなった。特に「あれもやったら？これもやったら？」といった必然性のない思い付きの追加実験・解析を要求してくるものが多い。この手のコメントに反論するため、5ページ以上にわたるレスポンスレターを書くことも稀ではなく、研究者の建設的業務の時間を削っている。

- 二重投稿。2 つの別々の雑誌に投稿された論文の査読を引き受けることにした際に両論文が同じ論文だった。
- 査読者が個人的な見解を強く主張している。
- あまり学術的な理由を述べず、ただ研究の質が悪い、ということで Reject している査読者がいて、結局もう 1 人査読者をお願いすることになった。
- 投稿者が査読者を推測した上で、自分の方がこの分野に精通している（しかも職格等が上である）にもかかわらず、不当な査読結果を出されたと憤慨し、編集委員会に抗議を申し入れてきたことがある。抗議については却下し、査読結果を尊重したが、無駄なやり取りに時間を割かれ編集作業が大幅に遅延してしまった。
- 査読を受諾した査読員が締切りを過ぎても査読レポートを出さず、その結果、非常に少数（1 名）の査読レポートのみに基づいて Editor が投稿論文を却下した（トップジャーナルにて）。
- 論文が増えすぎて、すべての査読を引き受けていたら自分の研究が進まないので、IF などを参考に断ることも多い。
- 自分が共著で書いた論文に対して、自分に査読依頼が回ってきて断ったことがある。
- 再録規定のない和文雑誌と海外学術誌に掲載された図がほとんど同じであったこと.
- 論文全体の 7～8 割近くが二重投稿であったこと.
- 学術誌のレベルに合わせた査読が必要となる場合が多く、対応に戸惑った。
- 査読者がきちんと論文を読まずにコメントし、編集者が査読者の間違ったコメントをもとに採択・不採択を決定しているケースがよくある。また、ハゲタカジャーナルと言われているジャーナルから、専門分野と全く無関係な論文の査読依頼が来たことがある。
- 投稿者とは異なる理論に基づき研究する査読者が、査読報告のなかで、理論の違いに基づいて投稿者の批判を展開することがあった。将来の読者代表として、理論の違いを離れ中立的な観点をお願いしたが、うまくいかず、結局、さらに 1 名の査読者を新たにお願いした。これ以外にも、査読プロセスで一種の「論争」が始まってしまうことがあり苦労した。
- 剽窃、二重投稿を発見した。
- 査読に時間がかかり過ぎ、指導院生の学位取得や若手教員の昇任が遅れた。
- 査読結果に不服で査読者の能力不足を指摘して抗議してきた人がいた例（なぜか投稿者以外の人が猛烈に抗議してきた）。また、それほど重要でないと思われる事柄に査読者がこだわり、過度に厳しい評価をした例。
- 特に若手・中堅の研究者が極度に厳しい査読を行って、採択される論文がかなり少ないことがあった。・当該論文をより良くしていくためというよりは、査読者が自分の知識をひけらかすだけの査読コメント（とても一論文では修正できる分量や内容

ではない）を提出することがあり、特に若手（大学院生）の投稿者の投稿意欲や改稿意欲をそぐことがあった。

- 守秘義務のため回答を差し控えます。
- いくつかの学会の編集委員を兼務していたために、二重投稿を見つけることができた。
- 著者の不正（すでに公表した論文とほぼ同じ論文の二重投稿）について、1 名の査読者は発見して指摘したのに対して、もう一名は気づかなかったことがあります。もちろん却下しましたが、この指摘に対して、著者から、編集委員長に「なんとか（採択）してくれ」と直接連絡があり、お説教しました。不愉快な経験でした。
- 編集委員が架空の査読者アカウントを作成し，自分で書いた査読をそのアカウントを通じて提出していた．yahoo 等の無料のメールアドレスが使われていたため，発覚に繋がった.
- 査読した内容を、投稿者が納得せず、そちらから質問攻めにされたことがある。
- ジャーナルポリシーと異なる基準で査読コメントが返却され、編集委員もそれに対して積極的な行動がなかった。(2)執筆者の投稿論文がフォーマットに準じでいないなど問題がある原稿がチェックなしに編集者から査読者に送付されてくること。(2)執筆者が研究倫理違反をしていることを査読者として指摘したにも関わらず編集者がそれに対して反応がなかった。
- 査読者が見つからずに推薦願いの連絡がきた。
- 欧州の状況を前提にしてコメントがなされたことや、査読者が筆者と異なる立場を前提にして批判していることが明らかな場合、その旨を指摘して加筆修正しなかったことがある。これは問題事例ではなく、日常生じている事象かもしれない。
- 誤って、自分の論文の査読を依頼されたことがあり、もちろん説明して断った。査読者のコメントが間違っていることがあった。査読者の指摘に応えて、当初のデータの数倍のデータを追加して再投稿したら、たいした理由なく、「余計悪くなった」と言われリジェクトを示唆されたことがあった（おそらくライバルだったと思われる。編集者の判断でアクセプトされた)。レフェリーが、自分が出している論文にすら反するような主張をして、攻撃してきたことがあった。
- タバコ産業の研究者が投稿した場合の COI 表示は自機関の研究費によるという申告になるため査読をはじめたが内容がおかしいと思い編集に問い合わせて、COI があることに気がついた。
- これまでの経験では、査読による問題を感じたことはありません。むしろ、査読者の意見も正当であり、執筆者も査読者の意見を活かして、論文の質が向上したという経験しかありません。
- 査読委員として、査読者を推薦したが辞退され、査読者を決定するまでに時間がかかったこと。

- 出版倫理に反する案件（二重投稿やねつ造等）があり、それを査読の段階で見抜くのは難しい。出版までに至ると撤回（retraction）が難しい。
- クレーマーとして著名な被査読者からの不当なクレームがあり、編集委員も含め対応に苦慮した。
- 「落とす」ことを前提にした査読者によって，本来掲載されてしかるべき論文がリジェクトされることがある。
- 査読の作法を知らない査読者が多い。
- 投稿者が翻訳業者あるいはソフトを使っていると思われ、投稿者との直接の意思疎通が難しい。/査読者が当該誌の正確に鑑みて必要以上に厳しい要求をする
- 時間がないのか能力がないのか意欲がないのか不明だが、投稿論文に対して内容のないコメントをつけて返却されると採択不採択に限らず気落ちする
- 査読者が必ずしも研究テーマを十分理解しているとは感じられない場合があった。
- 現時点での学会区分に当てはまらない，いわゆる異分野融合的な研究課題は査読者が見つからないという理由で門前払いをされることもあります。
- 査読者が自分の研究グループの論文を引用するように指示することが多々あった。
- 原稿の推敲中のコピーアンドペーストで節の内容が入れ替わっている論文がそのまま提出された。推敲不足。
- 和文誌に既に掲載されているにもかかわらず、全く同じ内容のものが英文誌に投稿されていたため、査読で Reject した。
- 全く同じグラフを別の結果として異なる論文２件として投稿されたとき、たまたま、双方の国際会議の PC だったので、気づいたことがある。グラフを重ねたら、細かい線まで全て重なっていた（軸の単位は異なっていたが)。本来、その論文の内容だけではありえないことであるが、一方でグラフの形が特徴的でなければ見落としていたかもしれず、グラフの傾向としては論文内容として合っているように見えないわけでもなかったが、細かい山谷まで重なることはありえないと思われた。
- あまりに不公平な査読結果を受けて失望したことがある。また編集委員としてもがっかりする。
- 日本の英語雑誌で外国人に査読を依頼しても断られ、日本人しか査読依頼できない。知り合いの場合が多く、査読が甘くなる傾向がある。
- ジャーナルの格に対して、厳格すぎる査読を行なう査読者が多く、そんなに厳しいならと格上のジャーナルに投稿が流出してしまい、投稿が枯れて、その雑誌はほとんど発行されなくなった。
- 1. 査読者による投稿者への改善内容が適切でなかった。　2. 投稿者による改善点を正当に評価せず、書き直しを何度も求めた。
- ページ数が多すぎる論文
- （投稿者としての経験で）分野の違う査読者に当たり、論文のエセンスが伝わらず、

論文の趣旨と異なる部分でのコメントや修正指示をうけた。従うことは難しくなかったが、論文内容の査読となっていたとは思えない。/（編集者としての経験で）新しい分野の研究で、査読者が見つけにくいことがあった。投稿者の推薦に従って査読者を選んだが、同組織の人で厳格な査読となっていたかどうかが不明だった。

- 責任著者が読んでいるとは思えないような、卒論レベルの日本語論文が投稿され、大幅修正が求められてもなお責任著者が責任をもって修正していない事例があった。
- 編集主任の任にある際に、編集委員や投稿者のメンターから連絡があり、査読プロセスのあり方に対する疑義を投げかけられたが、それらは個人的な動機に基づくものであり、査読の公正性自体を問うものではなかった。
- 盗用、剽窃の投稿があった。出版後に判明して、これを学術誌から除外した。
- 査読者が掲載不可とした判断を編集委員長が圧力をかけて掲載可とさせたが、編集委員長と投稿者とが個人的に親しい関係にあったことがのちに判明した。掲載された後に委員会で問題視されたが、すでに掲載されてしまったことを理由に不問に付された。
- 査読期限を守らない査読者、査読内容の質が悪い査読者がいた。
- 査読者はすべての論文を読んでいる分けではないので、投稿論文の新規性、唯一性を保証することができない場合、コピペを Check するソフトウェアなどはあるが、文章ではなく内容の盗用を確認することが難しい。
- 国際学会の論文誌査読では、査読者が査読を引き受けて下さる確率が、当該論文誌のインパクトファクター等により変動する。
- 論文内容とは異なること（文字間隔等）で細かい指摘を受け，修正しても，さらに別の細かい指摘が続き，恣意的に論文を出させないようにしていると感じた。招待されて執筆した論文であったが，埒が明かないと判断し，取り下げ，別のジャーナルに投稿した。
- 一流の海外誌であったが、競争相手のチーム一員が査読に関わったと思われた事例を複数回経験した。査読を繰り返した挙句、投稿 1 年後の不採択。そのあいだに競争相手の論文が採択されて、世界で最初の成果であるとマスコミで大きく取り上げられ、その後の研究費の取得に影響した。
- (問題とまでは言えないが)　分析や開発を行う自然科学系の研究者から、人文社会科学や実践研究（教育実践）への評価が低すぎるため、マイナーな分野の実践研究などが査読者から評価を得られず、論文掲載に至りにくいことがあった。
- 最初に投稿した論文のコメントに対応した後の再査読において、最初とは異なるコメントを要求される（例えば、途中で編集委員が変わった場合など)。
- 二重投稿していた例が、特定の国からの論文で経験した。また異なる施設からの論文にも関わらず、実験方法が酷似していたり、論文作成会社の関与を疑わせる事例

を経験している。

- 投稿論文の中に同じ投稿者の以前の論文と同じ図が使われていた。投稿者の以前の論文で類似のタイトルの論文を確認する必要性を感じた。/特定の出版社から、専門分野に関係なく査読の依頼が頻繁に来る。どこから査読者の情報を得ているのか不安になる。
- 不適切な引用があったり、適切にデータが示されていないなど、いい加減な査読が行われているケースが散見される。
- 再査読の段階で新たな問題指摘が行われるなど、注文が繰り返され、最終的に掲載不可の評価を出すという信じられないような事例があった
- 最近、投稿者らと利益相反のある査読者に査読されました。当該査読者は匿名であるものの、ほぼ特定可能です。査読コメントは科学的でなく、「意味がわからない」「未熟」など根拠のない揶揄ばかりで、査読者の投稿者らに対する嫉妬としか思えず、怒りを通り越し呆れてしまいました。投稿者らは、「研究プロジェクトを主導した組織を守るために」、泣く泣く、冷静な対応をとることにいたしましたが、本来なら告発に相当する事例です。このような査読者にはペナルティを与えるなどの規定や、エディタの公正な判断を求めます。
- 査読者として，投稿者の捏造疑惑を偶然にも知ってしまい，内容の詳細を当該の編集委員会に報告した。その結果，当該の投稿論文は不採択となった（しかし，不採択の理由がわからない投稿者は，その後も，同様の捏造を繰り返している・・・・・らしい)。
- 問題事例ではないが、近年、投稿される論文の数が増え続けているため、査読依頼の件数が多すぎて、断らざるを得ない場合も多い。
- 査読者として、あるいは編集者として、あまりにレベルの低い論文に対して、昔は丁寧に対応したが、経験を積むと、投稿する側の教育が必要であると強く認識するようになった。
- 査読者依頼は、真面目に査読をうける医師に集中する傾向があり、また、専門領域によっては限られた医師に査読が集中し、査読の質の低下を招きます。最近 5 年間は、全く知らない雑誌からの査読依頼が数多く届き、困惑します。アカデミアに対する忠誠心を商業利用されているように感じる場合には、お断りしています。
- 査読は、方法論とそこから導き出される結論が、論理的であれば、たとえ査読者と立場が異なったとしても、投稿論文の採択を認めてもよいと考える。しかしながら、査読者の意見と対立し、拒否されたケースを経験した。
- 編集者として査読者を探すことが年々難しくなってきています。特に大学教員は多忙のため査読を断ることが多くなっています。
- 査読者の論文の方法（おそらく）と比較するようにとのコメントを受け、比較を加えた改定稿を提出したら、その結果が気に入らなかったようで、2 回目の査読では不当

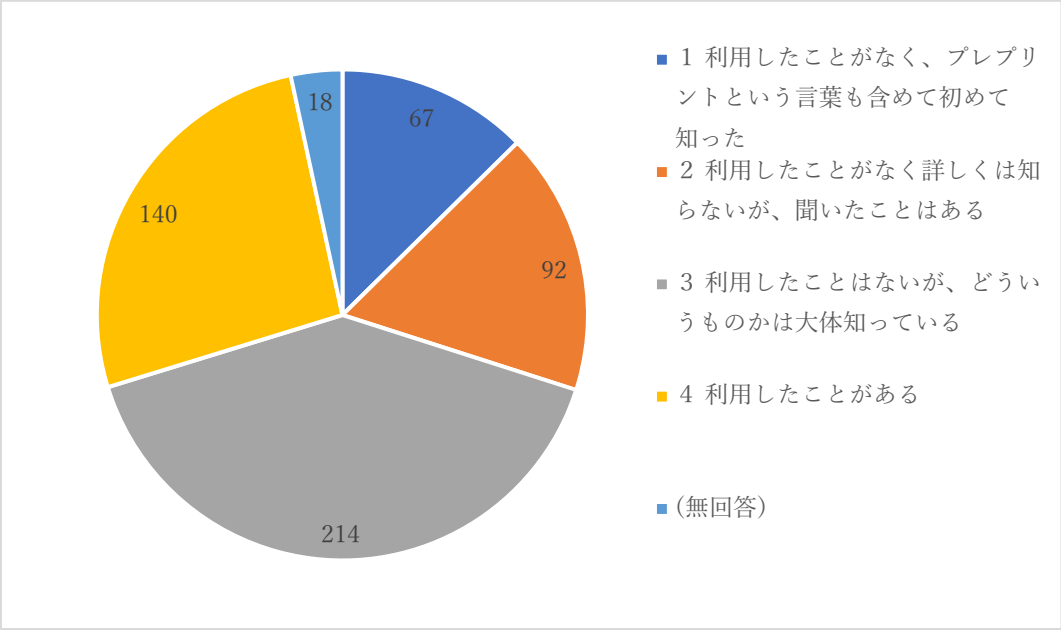
かつ大量（11 個）のコメントをしてきた。最初の査読コメントにはなかった新しい要求もあった。その対応には大きな労力を要するものであったため、エディターに連絡し、現在返事待ちの状態。

- 近年，共同論文が非常に増えてきたため，利害関係者ではない査読者を見つけることが困難になってきている印象を持っています.
- 米国の専門誌に論文投稿後に 5 か月以上待たされ、査読者 4 名からのコメントがかえってきた。3 名のコメントは、論文受理を勧めるそれであったが、ひとりの査読者がまったく的を射ないコメントと論文の受理に関して却下を強力に勧めていた。そして、最終的に担当編集者の判断は、この論文に却下と回答してきたが、その理由のほとんどは、却下を主張するひとりの査読者のものだけであり、反論の余地も与えらなかった。1980 年代半ばのはなしであるが、当時、大学院生として筆頭著者であったので鮮明に記憶している。新たな白血病ウイルスである HTLV に関するもので、当時、米国と日本の研究者のあいだでこのウイルス研究に関して競争が激化していた。同じようなことがしばらく続き、HTLV の研究成果は、日本あるいはイギリスの学術雑誌に投稿し、受理され、公表されていた。
- 国籍および人種によって、査読期間に大きな遅延、差別が生じたことがある。
- 査読から帰って来るのに長時間かかり，いきなり掲載拒否の通知を受けた．その後，類似した研究が他研究組織から報告された．偶然かも知れないが，当然研究はそこで中止された.
- Editor としての対応：1）著名な研究者が査読意見に従わず、reject した場合の妥当ではないクレーム　2）AI で論文を作成したのではないかという査読意見に対する
- 査読からの返却がとても長く、その間に同じ調査地での研究が似通った視点での論文が公表された。論文の執筆者に、査読担当者が入っており、投稿・受理の日時が、長期に渡った査読期間中だった。
- 編集にかかわっている雑誌で過去に掲載した論文にデータ捏造疑惑が生じ、著者等に連絡するなどした後、掲載論文へのコメンタリーを発表した。論文自体をよく読むと、査読段階で問題に気づくことができる可能性もあったが、性善説で行っている査読ではその検出は極めて困難であった。逆にすべての査読を性悪説に基づき、捏造等の可能性に気をつけながらするとすれば、引き受けてくれる研究者がいなくなるだろうと思った。
- 複数の査読者の間で、求める修正の方向などが異なるだけでなく、反対のようになることも珍しくない。第三、第四の査読者を依頼する場合もあるが、どの意見を重視するかは編集委員会の責任となる。このことを、投稿者・査読者に前もって知らせておく必要がある。
- 査読コメントに対しての返信へのレスポンスが不当に遅く感じられたことがある。（その際、一部悪意を感じるようなコメントもあった）

- ジャーナル側が査読期間を短く設定しすぎである。査読依頼は急に来るものだし、正確公正な査読をするには（査読の質を維持するために)、査読期間は査読者が引き受ける際に決めるべきである。それが気に食わない場合は、ジャーナル側が査読依頼を引き上げれば良い。また、ジャーナル側が出版までの日数が短いことを売りにするのにも問題を感じる。いち早く結果を公表したり、学位取得のために早期の査読完了を求めたくなる気持ちはよくわかるが、研究者コミュニティ全体で、そのマインドセットを変える時期に来ているのではないか。質の低下により、学術コミュニティ全体が自滅するのではないかと危惧する。
  ＊ 投稿者の研究者としての資質への疑問を査読結果に記載するという事案。＊特定の査読者が、非常に高頻度で「却下」判定を行うという事案
- 査読者から、自分の主張に合うよう、論文の考察を修正するよう求められたことがある
- 委員の交代にともない、新旧の委員で投稿された論文の評価が異なった。その際、委員会内で調整を行ったが、ありうる事態とはいえ、望ましいものではなかった。
- 編集者が、査読者の査読結果に基づいて自分で判断することをしていない。査読者の質よりも、編集者の質に疑問を感じることがよくある。
- 丁寧で公平な査読をしていただける研究者数には限りがあり、近年の雑誌数・投稿数の増加にともない、こうした研究者に査読依頼が集中する傾向があり、査読を引き受けていただけない場合が生じている。また、時間をかけていない粗い査読に遭遇することが以前よりも増えた感がある。
- 査読を引き受ける人を見つけるのが大変なケースが多い。
- 一度目の査読で 1 か所のみ修正、修正後採択とあり、2 度目の査読で、論文の種類の変更を進められた。
- 1 回目のリバイスでは指摘していない点を、2 回目以降のリバイスで新たに指摘された。
- 編集委員としてハンドリングした論文に、査読時には知り得ぬところで、データ公表権侵犯のクレームがついた。
- 著者として投稿した論文に対して、匿名の査読者から、研究者としての人格を否定されたと感じるほどに厳しい査読意見が返ってきた。
- 「ダブルブラインド」が守られなかったことがありました。
- 特になし（10 件）

問20.　一部の研究分野では、迅速に研究成果を発表するため、査読を経ていない論文原稿を「プレプリント」としてオンラインで公開する方法が活用されています。あなた

のプレプリントの利用経験についてお答えください。（回答対象者：531 名）



問21.　査読制度について思うところを自由に記述してください。

- あった方がよいと思う。
- 査読制度が一般的でない研究分野なので、査読性雑誌への論文の掲載で評価が行われると不利益である。
- シングルブラインドとダブルブラインドに関しては自由に選択できる用にするのが望ましい
- 一度，利用したが，やはり査読を経て掲載された方が自分としてはすっきりする．
- 問４が３つまでしか選べないのは不適切な質問と思いました。どれも重要です。
- 分野によって査読があったりなかったり、また査読の基準も様々であるのに、研究職の公募や各研究機関での昇任等の基準は分野に関係なく一律になっていたりと、客観性や公平性にかなりの問題を抱えているので、学術会議として比較検証し、見解を示して欲しいと思います。また、法学分野のように、査読にはなじみにくい研究分野もあるので、補助事業の採否の際などに研究分野間の研究成果公表手段の際による差別的取り扱いが生じないよう、注意を払って欲しいと思います。
- プレプリントは，アイデアを盗まれる可能性があり，利用する気になれない．
- 私の専門分野では、商業出版の編集者の能力は非常に高く、原稿を依頼される段階で、活字にする意義があることは確保されている。理科系とは、査読制度の存在意義が異なっており、同様に論じるには無理があるように思う。
- 査読制度は必要と考える。　時には、研究内容が査読者によって正しく理解されない場合もあるが、そこは、編集者の責任において対応すべきと考える。

- 必要であると思うが、査読者の恣意的なコメントがあったりして、不快な思いをしたことがある。
- 査読がない論文が業績としてカウントされない分野もあるので、適正かつ査読者が楽になる制度を今後も探し続けるべき。
- 学術誌のレベルを維持するためには今までのような peer review が必須である。その一方で、忙しい時期に査読を引き受けてしまい、本業に支障をきたすことも何度かあった。
- 現在の査読制度に問題点はあるかもしれないが、長年行ってきた方法で良い方法だと思う。変更すれば、別の問題点が生じる可能性が高い。
- オンラインジャーナルが増加しているなかで、一部のジャーナルは収益事業として運営されているとしか思えません。そういったビジネスに出版料を支払って論文を渡し、無償で審査を行うのは、あまりにも馬鹿げた状態と思います。
- 査読制度は必要と思うが、学内紀要などでは形骸化されている場合も少なくなく、科研費などでの業績申告の際、査読の有無を記載することにはいささか懐疑的である。
- 査読論文であると評価が高くなるということで、査読式を取り入れる媒体が増えてはいる。論文の質の向上にある程度は貢献していると思う。自分はほぼもっぱら査読する側なのだが、数ページにわたってびっしり指摘事項を書くのは非常に大変。院生の場合には、まずは指導教員が行うべき指導（指摘）をせざるを得ないことが多く、指導教員はいったい何をしているのかと疑問に思う。博士課程を経ていない者の論文の査読は、さらに苦労が多い。加えて、査読は無報酬であることが多いし、査読者として名前が出るわけではない。ある学会（私は非会員）から依頼を受けて査読（2 回査読システム）して無報酬だったこともある。労働に対する報酬はある程度支払うべきだと思う。
- 「プレプリント」をおこなえば、学術の質が確実に下がると感じる。
- 明らかにおかしい結果が，Nature をはじめとしたいろいろな雑誌に出ている。これは，査読制度の問題ではないが，その分野における編集者と査読者の質に問題があるといえる。
- 査読には時間と労力がかかるが、ピアレビューの精度は、学術活動の根幹をなすので、継続する必要がある。その場合に、査読者の労力を減らす仕組みを導入する必要がある。例えば、引用文献の容易なアクセス。
- （自分自身経験上から）MDPI など査読の水準が明らかに緩いジャーナルのインパクト・ファクター値が上がっており、（もちろん個人の自由であるが）それを利用する研究者が増え続けている状況に危惧を感じる。それを好ましくないと思う一方で、延々と時間と労力をかけてしっかりと査読をするがインパクト・ファクター値が高くないジャーナルに論文投稿する意義に疑問を感じることもあり、大変悩ましい。

学生たちも、簡単に採択されると評判の MDPI 系ジャーナルへの投稿を希望してくることもある（私は考え直させるが)。

- 近年、査読者としてのジャーナルからの依頼の数が尋常ではなく、ほとんど断っている。一方、エディターとして査読依頼しても、ほとんど断られる。現行のボランタリー・ベースの査読制度が破綻しつつあるようにも感じる。
- 査読は必要であり、高いレベルを持った査読者の育成と確保が必要と思う。
- 問 20 のプレプリントに関してですが、日本語圏では、Jxiv のおかげでほとんどすべての分野でプレプリントが可能となっているので「一部の研究分野では」という問いはミスリードになってしまっていて適切ではないように思いました。ご検討ください。
- 専門化しすぎで各分野の作法に従うことばかりが求められ、社会的に意味のある研究が評価されにくくなっていると感じる。
- 論文査読は概して問題点を指摘することが多いが、いい結論を誉めることも必要であり、第三者の意見、感想を知ることができる点を評価したい。
- ＩＦ１０以上の Flagship ジャーナルの編集委員をやっているが、最大の課題は、適切な査読者を確保できない点である。確保できた場合も査読レベルが低い場合が多い。要するに査読者が自身の論文執筆に時間をかけ、査読は軽視している傾向にあると感じる。
- 論文を投稿する研究者には査読の義務があることを認識すべきである。
- ピアレビューによる論文査読は、出版する論文の質を高く維持するために必要にして効果的な方法であると思います。
- 査読を経ないで出せるいわゆるプレプリントというものを持っていることは研究成果の公表方法として重要と思います。
- 論文執筆や査読について、中高生くらいから触れる機会があってもいいと思う。論理的な思考や記述の基礎は、社会基板として重要だと考えます。
- 学術の水準を維持、向上させる上で大変重要な制度であり、公正な査読が行われるよう努めていく必要があると思う。他方で、適切な水準の査読を行うためには査読者に小さくない負担をかけることになるほか、査読者を選定する編集委員会の負担も小さくない。私の分野では、査読は基本的に無報酬で行われているが、金銭的なものか否かにかかわらず、査読に携わった研究者が報われる仕組みがあってもよいと思う。
- 査読制度は研究成果の質を維持するためには必要であるが、必要以上に厳しくすることで迅速な研究成果の公表を阻害する面もあるように感じている。研究分野により違いはあろうが、査読を必要以上に厳しくすることのないような査読者向けの指針なども必要なのではないか。
- 担当した論文の場合，内容の質が低くそのまま公開されるのは読者を混乱させるた

め，査読は必要である。自信が査読者の場合，投稿者に知っている名前があると，査読内容を多少なりとも忖度してしまう懸念がある。一方で，編集者や査読者の作業は無償である場合，その負担は大きく，有償にするべきと考える。

- 科学の発展のための正当な審査としての機能が厳守されるべき。
- 特に　国内の学会誌の間でレベルの差が大きすぎるように思う。日本学術会議の協力学術研究団体については、なんらかのガイドラインを作成してもよいと考える。
- 現時点での研究の最先端を適正に知るには必要であると思う。
- 主義主張を超えた公正・公平な査読制度の確立が望まれる。
- 徐々に査読制度に意義を見出しにくくなってきました。査読者と編集者の質に大きく依存するのではないでしょうか。よい査読者に出会えた時の喜びは大きいですが、その逆の時もあるからです。
- これだけ雑誌が増えると、アカデミアに多大な査読コストをかけることになり、維持は大変だと考える。制度上の工夫が必要だろう。匿名制度とは逆の査読プロセスの全オープン化もひとつの手かもしれない。
- 公明正大であるべき。
- 査読制度については意見交換や教育の場が必要と思います。また、編集者として査読者の審査結果をどの程度覆して良いか判断に苦慮することがあり、編集者としての意見交換や教育の場も意外に重要ではないかと思います。査読コメントは公開にするのが良い気がします。但し査読者名を公開すると自由なコメントが出来なくなる恐れがあり、匿名が良いと思います。ハイインパクトな商業誌の査読において著者名から生じる編集者・査読者のバイアスは深刻ですが、トリプルブラインドは査読の公平性を促進する一方で、論文の質保証や商業誌の特性を考えると、実現は難しい気がします。近年、学会での企画がシンポジウムに偏り、一般演題や質疑応答の時間が減少していますが、査読の質の低下の遠因になるものと推測しております。
- 20 年ほど前までは、論文の査読は研究者にとって良い勉強になり、研究者育成には欠かせないと感じていた。しかし、アカデミアのポストとサイエンスサポーティングスタッフの減少などが原因で、論文査読の時間すら無くなってきているのが現状。また、内容のしっかりした論文を 2 週間やそこらで査読する時間的ゆとりもなく、研究者育成に役立っていない。また、考えられる技法を用いたデータを全て出せというような無頓着な査読コメントを受けることが多く、手持ちのデータから何を確証し、何を推論し、現段階での結論、あるいは仮説を導くかという『ものを考える』という立場に立った有意義な査読がすくない。こんな査読では AI に査読させる方がましかもしれない。
- 適切なレフェリーを獲得することが難しい（忙しい、分野が狭い、など）点が、一番の問題と思っています。
- 古き良き時代の、査読者とのやり取りによって論文の質を上げる過程はほとんどな

くなってしまったのではないかと思う。査読に時間がかかり、それを無料でサービスとして行うシステムが時代遅れに感じる。自分がＥｄｉｔｏｒになった場合でも、臨床系の論文では特に、査読依頼に返信がなく、Ｒｅｖｉｅｗｅｒを見つけるにも時間がかかり、見つかってもベストとはいえない人になってしまう。

- Double-blind の論文の書き方について、Editor 含めて誰も指導してくれなかったのは問題であった。
- 学術雑誌の編集や論文の査読は所属研究機関・大学の業務とは別に無償で行われているのが一般的なため、負担感が非常に大きい事に加え、業績としてもカウントされないことから、忌避する方が多い印象がある。学術の発展のために不可欠な制度なので、持続可能性を高める工夫が必要と思う。諸外国では、学術団体の役職に就くと所属大学の教育負担が軽減されるなどの慣例があると聞く（イギリスなど)。そうした制度があることを国内でも周知し、学術雑誌の編集業務を担う先生方が、無理なく業務をこなせるような環境作りが必要と思う。
- 私が所属する天文学の研究分野では査読制度はかなり健全だと感じている。私が投稿者として経験した限り、査読者は論文の不十分な点を過不足なく指摘しており、また論文の完成度を高めるように努力されていた。査読に要した時間も１～２か月であり、許容範囲である。悪意を持って研究内容を否定することもなく、また無駄な論文を引用するよう強要することもない。時折そのような「引用の強制」に類する噂を聞くことはあるが、総じて健全に査読が行われている、つまり明白な誤りや極端な内容の不備を排除して論文の質を高めることに査読が貢献していると思われる。一方、身近な生物学者から、ほとんどの場合に査読者の意見として追加実験を行うことが求められるといった話を聞いた。哲学者からは、査読に一年ぐらいかかるのはよくあることと聞いた。社会学者からは、雑誌によっては政府方針に批判的な内容であることが査読者から求められるといった話を聞いた。
- 私の分野（臨床医学）では、編集委員として適切な査読者を確保するのが困難な状況にある。無報酬でのピアレビューという制度は、もはや限界に達している。
- 研究成果を相互に評価する方法としては、学術論文のピア・レビューによる査読だけではなく、学会・国際会議の招待講演など他にも様々な方法で行われており、査読制度のみ厳格にしても仕方ないという側面があります。
- 査読が無償ボランティア前提で運営されている場合，１）期限厳守と内容を含む質の保証，２）守秘義務，３）負担の偏り，等の問題の温床となっていると思う。ジャーナルの利益をなぜ「一部の」研究者が自分の時間を削って捻出した時間や知見によって支えなければいけないのか。
- 査読を依頼しても引き受けて貰えないことが多く困っている．特に最近，査読者をAI が推薦するようになってからひどい．10 人頼んで１名もやってくれないこともある．

- 最近，論文数が業績評価や会議出席の判断で重視されるためか、出版の価値がないと思われるジャンク投稿が増加して、査読の負担が急増している。AI などを活用してそのような論文を自動的に排除する仕組みが早晩必要になると思う。
- 査読への著者からの異論申し立て可能回数に上限を設定するなど、査読・受理についてのルールを明確にして学会員明示するなど、査読システムの明文化が必要と思う。
- この 2 年ほど、オンラインの査読システムを導入する作業をしていて、たいへんなエフォートを割いている。委託業者を決めるのも大変（情報がない)、委託業者との調整も大変である。このような情報を集約して、業者の役割を学術会議の一機関としてほしい。学術会議は、現在のような提言の発出、シンポジウム開催などだけでなく、実質的に学術業界を支える事業を行ったら、もっと研究者から支持を得られるのではないか。夢物語かもしれないが、収益も挙げて、政府から独立できるようにした方がよい。
- 必要な制度。他の研究者の自分の研究に対する意見が聞けるのは良い。
- 編集者としては、適切な査読者を選ぶことが重要である。また、査読者によっては査読を練習と称して格下の共同研究者や学生に回すものがいるので、編集者は査読内容を精査する必要がある。また、査読者で意見が対立した場合は、第 3 の査読者を採用する場合があるが、編集者自身の判断も重要である。なお、学問レベルからみて投稿論文を査読する研究者が限られる場合もあるが、常に査読者リストを更新する必要がある。
- 査読にはかなりの労力を要するので何らかのインセンティブが欲しい。
- 適切な査読をスピーディーに行うことに尽きると思います。国内のジャーナルは私の分野では総じて査読が遅く、外国の共著者に恥ずかしく思うことが多い。
- ほとんどの場合に査読者にメリットがない。
- 学術雑誌の増加により、査読の負担は非常に増えている。そのうち機能しなくなるのではないか。雑誌によるが、質の低い査読が多くなってきた。
- 査読は厳正に行われるのが基本であることは言うまでもない。そのためには査読者はあらゆる利害を排除し、公明正大に客観的事実に基づいて的確に行うべきである。また、知り得た内容についての守秘義務を負うのは当たり前のことであり、厳格さが求められるのは当然である。
- 私が学術発表について書いたコラムの一節を以下に示します。
- 学術発表とは、自分が新たに見出した原理や事実などを公開することである。個々で行っている真実の追求作業が「学術発表」という舞台を置くことによって人類の共同作業になる。「学術発表」が行われることによって学問の進歩速度はとてつもなく速くなる。人間社会にとって大変有難い「学術発表」であるが、公開する側は公開によって何を得るのか。発見した新たな原理や事実をもとに利益を得ようとするの

であれば、他人に知られないようにしておく方がいい。経済的利益を捨て公表するのは「名誉」のためにほかならない。「名誉」は素晴らしい研究成果を上げたことではなく、それを公開したことに対して与えられる。素晴らしい研究成果を上げたとしても、自身や所属する企業の利益のために公表を避けるのであれば社会は名誉を与えない。

- 不当だと思える査読や編集者の（査読に回さずに却下するなどの）判断によって論文の公表が大幅に遅れるのは残念なことだが、かといってプレプリントのように査読を経ていない論文があちこち出回るのも危険である。現在査読の問題と捏造論文の問題、そして査読の弊害の対応策の一つとして登場したプレプリントの問題はそれぞれ絡み合い、余計に複雑化した難しい問題になって来たように思える。
- 出版される論文数がきわめて多くて専門分野の全体が把握しづらく、また非常に短期間で査読を求める学術誌もあり、査読自身がどれほど本来の機能を果たしているか疑問に感じている。また、私は編集長であるが、多くの担当編集者が査読者を見つけるのに苦労していることを考えると、最終的には専門家が査読するにしても、投稿の初期段階では AI を用いて選別するなどの方策を考える必要があると感じている。
- 一定の論文の質を保つためには、科学者の良識に基づく査読精度は必要と考える。
- 良心的な査読者は時間を割いて丁寧に査読を行っているが、これが査読者の良心に頼るものであり、研究者の業績として全くカウントされていないところが、査読制度に関する諸悪の根源だと思う。
- 査読制度は研究内容や成果の質を向上させるために大切な方法であるため、これからも査読の精度を高める工夫と努力を継続していくことが必要である。
- 査読者のコメントによって、論文の質が高められることが多い。従って、とても有用な制度だと思う。そのためには、良い査読者が大勢いる必要がある。学術誌に投稿される論文数が一定数を越えて増え続けると、この点を維持できなくなり、学術誌として破綻する。簡潔な論文を書くこと、迅速に査読すること、これらを互いに守り、良い査読者を育てるためにも、一つ一つの論文査読を丁寧にやっていくことが必要である。
- ボランティアベースで査読するピアレビューの重要性はわかるが、一方で APC が上がりすぎ、研究者の負担ばかり増えているのが問題のように感じる。eLife の査読制度のような取り組み賛同できる一方で、明解な解決策はなかなか見つからない気もする。査読への accreditation など、インセンティブを推奨して研究者としての資質を図る 1 つの目安にするなどはどうだろうか。査読者を明らかにするのは透明性は確保できるが査読者のプールが減ってしまうことが懸念されるのではないか。
- だれをも満足させる方法ではないがいまのところはもっとも妥当な選択枝である。現在の問題は適切な査読者を確保できずに審査が進まないことで査読の質が低下す

ることである。Chat-GTP などの AI の使用は禁じられているケースが多いが、将来的には情報の流出を制限した上で活用して、査読者の補助とする方が有効だと考えている。

- 先般に不適切な査読者事案が報道されていましたが、大変残念です。また、噂の域でしかありませんが、重鎮の研究者が自身の説と合わない投稿論文に非常に厳しい評価を下しているという噂を耳にしたこともあります（査読者は非公開なので真偽は不明)。査読の形態はどうであっても良いと思いますが、科学の信頼性や客観性の確保の観点から、論文公開時には査読者名と担当編集者名は公開されるべきと思います。これによって利益相反や不当な競合相手の排除といった科学の信頼性や発展を損なう事案はかなり防げると思います。一方で、査読を経ないプレプリントが蔓延することは、科学の質の確保からあまり好ましいことではないと思います。
- 査読制度そのものは学術の水準を保つ上で必須であり、査読は研究者の義務とは思うものの、依頼が多すぎて断らざるを得ない状況にある。
- 国際的な競争環境で進められる最先端研究では、公平な査読をしてもらうことが、決して当たり前にはゆかない。査読制度は、学術誌の発行機関（出版社、学会）や編集者、それらが所在する国とも関連が深い。トップレベルジャーナルが欧米の発行機関に占められている現状では、編集者や査読者の国籍も偏る。しかしなかなか表立って議論されない問題となっている。
- 査読人によりバイアスがかかることが結構多い。査読者として見識ある人をどう選ぶかが一番重要である。
- プレプリント→経済学分野では Working Paper と呼ばれていると思います。査読依頼を受けた論文を Web 検索すると Working Paper が見つかり、著者や所属機関が分かることが多いので、一定水準以上の学術雑誌ではダブルブラインドは現実的にあまり機能せず、シングルブラインドで査読を行うことが現実的だと思っています。
- 学問分野によって、新たな事実の提示だけで査読を通る場合と、新たな事実の提示に加えて学説史上の新たな知見の提示がないと査読に通らない場合のように、査読の意味づけが大きく異なっている状況があるが、査読の有無で研究業績を評価する考え方が主流になると、異なる研究分野の間で業績評価の不公平を招きかねないことが懸念される。また、査読の有無で研究業績を評価する風潮が強くなることにより、新たな事実の提示や研究資料の整備といった基盤的な仕事が十分な評価を受けない傾向があるように感じられ、そのことは学術研究の発展を阻害しかねないと憂慮する。
- 日本人研究者は査読の問題点を列挙して，受け身（審査される）という意識の研究者が多い様におもう．論文は研究結果を報告することで真理の探究に資するという事にある．その点を鑑みるならば，査読によってその点を点検するとともに，査読者が論文の質やわかりやすさの向上に協力するという点を知ることが重要と思う．そう

した点も含めて，査読の意義，必要性，ありかた，査読者の態度等をまとめたパンフレットの作成が有効かも知れない．

- 編集委員が査読を依頼する前に論文内容をチェックしないため，査読担当者への負担が大きい．査読の問題だけでなく，適切な編集についても議論すべきである．
- 欧米の学術書出版では、各社の規程に応じて、単行本であっても査読制度があり、それが出版における学術の価値を守っているとも言える。日本の場合、各種の出版助成によって（極端な場合は、出版助成さえあれば)、出版物を出版できるという状況である。社会における学術の価値を守るためには、出版物における査読制度を質保証という意味で社会的に認知された制度にしていくことも必要なのではないかと考えている。そのための補助金や審査体制を、学術会議発で検討してはいかがであろうか。
- 投稿された論文の内容について適切に評価ができる研究業績を有する査読者が少ない、大学における日常業務の負担が大きいとして査読依頼が何度も断られる、など、査読者を見つけることが難しい場合が以前より増加している。学会の財政規模によっては、査読者への謝礼を出せない場合もある。学術の質向上のために、投稿者・査読者の双方が協力的に取り組むのが査読制度を支える精神であるが、いわばボランティアで査読を担当することに抵抗を感じる研究者も多く、制度の持続可能性を確保するための戦略的取組が必要ではないかと考える。
- 研究論文を公表する際に、その分野の専門家による査読制度は質保証の点で重要と考えている。一方、著名な研究者の論文については、その名前だけで審査が甘くなる恐れもある点は問題であり、これらの改善のための方策として、査読者、査読意見、編集者の公開をするなどの対策も必要になるのかと考えている。
- 研究分野が細分化されている現在、審査可能な査読者を十分な人数確保することはかなりの困難を伴うことから、学協会等が関連学術誌等に向けた適切なサポートをしていくことが今後重要になると思われる。
- 論文と掲載雑誌の質を保つために査読は不可欠である。しかし質の悪い査読者にあたると投稿者が不幸である。学会等で査読者を育てるシステムを構築することが望ましい。
- 一部の一流学術誌を除けば、現行の査読制度はほとんど機能していないと思います。これを改善するのはまず不可能なので、一流誌以外はプレプリント制に移行した方が、より健全な研究活動がおこなわれると考えます。
- 分野によって査読の仕方は異なるべきであり、本アンケートのように分野を限定しない形で調査を行うことは、有害である。
- 匿名査読では少数の編集委員だけで査読者を決定しなければならず、特定の編集委員に負担が掛かります。ジャーナルの持続的な刊行にとっては、これは好ましいことではありません。

- 編集・査読者として論文査読をする際に、個人レベルで不正を検出することはますます困難になってきています。最低限の剽窃や不正を検出する機能をすべての学術誌編集室が備え、編集委員・査読者をサポートすべきと考えます。基本的に編集委員・査読者は、自身の研究時間等を削ってボランティアで行っているため、少なくとも学協会が発行する学術誌などでは、充実すべきですし、日本学術会議もそれをさらに推奨・支援する必要があります。
- 一部の査読者に集中する傾向が強い。投稿はするが査読は断る研究者が多い。
- 客観的な判断がなされたものを残すという意味で、非常に大切です。
- 多忙のために、査読を引き受ける研究者の割合が低下し、査読者の選定に時間がかかりすぎる。査読は研究者の義務だとは思うが、個々人の時間的負担に依存して査読システムが成り立っていることは、改善の余地があるのではないか。特に、商業学術誌が無償で査読依頼をすることには疑問を感じる。
- 若手研究者に査読を依頼すると否定的な意見を書くもののように思っている人が少なくなく査読者と投稿者の連携でより良い論文にしようという理解が乏しいように感じている。
- 国際会議へ投稿するのと同時にプレプリントの arXiv に登録することが広く行われているため、査読者やメタ査読者が担当論文のタイトルから容易に著者を調べることが可能となっている。そのためダブルブラインドの基本原則が守られないことが問題。
- ジャーナルの数が増えるに従い、査読能力の低い研究者にも査読を依頼せざるを得ない状況が増えている。査読する側としては、忙しい毎日の中で査読を行うことの負担は大きく、また査読するインセンティブがないケースも多い。研究者間の相互協力という形でのボランティアとしての査読制度の限界を感じている。投稿論文の内容について、すでに過去の論文との類似性などをしらべる IT システムが導入されている雑誌が多いが、記述の正確性や新規性、手法の妥当性なども AI が検定し、査読者の労力を減らす時代になっていくことが予想される。
- 欧米のジャーナルから査読の依頼があるときに、苦労することがある。細かいチェックリストに対応させたり、英語で微細なコメントをするのに時間がかかるため。
- 時間がかかりすぎ（メジャーな雑誌でも時には 1 年を必要とする）、また詳細な査読への対応に疲れてしまう（チャレンジすることが不可能と思われるようになる。）。特に、大学院生の投稿の場合、多くが初めての経験だが、煩雑な投稿作業（規定が難しく、大量の書類やサインを提出しなければならない）上に、めまいがするほどのたくさんのコメントを受け取ることから、まだ、査読結果を数カ月待たないといけないことから、今後、研究者として投稿を進めていく意欲を削いでしまう（こんなに大変なら、もうやめたい、と思ってしまう学生が多い。）。
- 査読の指針を設けて公表することの重要性を、このアンケートで改めて感じた。

- いわゆる「文系」「理系」で査読付き論文の本数が大きく異るにもかかわらず、業績評価等において「理系」の査読付き業績が多く、公正とはいえない評価がまかり通っている。「文系」内でも分野によって大きな差があり、査読付き論文にもとづく業績や勤怠の評価は十分な公平さの確保が不可欠である。
- 査読を受ける場合、自分が完成したつもりであっても、気がついていないことや、論理の一貫性の不備等について指摘され、論文の質が上がるのを実感しているのでで、必要な制度だと思っています。最近査読における不正が報道され、また論文そのもののデータ捏造等がしばしば起こっていることから、研究者自らが研究に対する信頼を損ねていることを、非常に残念に思っています。
- 査読の役割や意義は分野毎に異なる（とりわけ人文社会科学分野の査読は理系と大きく異なる）ので、その点をどう扱うか配慮が必要と思われる。人文社会科学系（全部ではないが）では、商業雑誌の役割が大きく（日本だけではなく多くの国で)、その場合には編集は一般的に編者（雑誌社だけの場合と研究者が参加する場合の双方がある）に任されており、投稿論文の質等はすべて研究者の自己責任に委ねられている。また、人文社会科学では査読の意義や手法が一般化しておらず、抽象的でも良いがガイドラインが必要と考えている。
- 自らの業績をあげるために安易に投稿してくる会員が多くなっている。その結果，投稿論文数が増え，論文の質が低下しており，査読過程が「論文指導」になってしまっている実態がある。
- 査読は必要であると考えるが，貴重な研究の時間を割いて査読を行っている先生方へのインセンティブを設けるなどの制度が必要であると考える．学務で忙しい中，複数の査読を抱えている先生方も多く，何らかのベネフィットが必要であると考える．
- 公開性が進むことは原理的には望ましい。が、トラブル回避は避けられない。学会誌は昔年、査読者のボランティアに頼る体制を続けてきた。質を落とさないためには、今後も「学会のため」「若手のため」等の要素が共有されざるをえないが、逆に、投稿者側によりそった公開性透明性の確保は運用面では難しい。現状でも若手の投稿が多い学会誌の査読よりは、各自の指導院生に時間を使わざるをえない。
- インパクトファクターを上げようとするジャーナルが、過度の修正要請をすることがあり、研究成果の公表の遅れや、短期間での追加実験による確度の低い研究結果が公表されることがある（研究不正を誘発しているともいえる)。現在ではインターネット環境が整っているので、公表前の査読よりも公表後の評価（オルトメトリックスコアなど）を重視することが可能となっており、事前査読の多くの問題を解決できる可能性がある。査読実績や編集実績が研究者としてより評価されるようになるとよい。研究成果のインパクトよりも研究手法や結果解釈の健全性を審査する制度が望ましい。

- 我が国の学術誌が編集委員会で採択を決定していた時代、編集委員長名で採択通知が送付される結果、担当編集委員名は表面化しないので、責任が曖昧であった。その結果、査読制度は、教官が学生論文を採点するような雰囲気で実施された結果、投稿者、査読者、Editor が平等な立場で査読を進めるという Peer-Review の精神が形骸化していた。研究の国際化が進むと共に、査読制度も国際水準に近づいたことを実感する。新しい発見を主張する研究論文の査読には、研究者の名声は無用である。同じ目的に努力する研究者として、誠実に応えて査読を行なっている中から、すぐれた Editor が育成される。正直で誠実に、という以上の基準はない。
- いろいろな意味で、難しいことと思います。
- 論文の価値は、査読を経ることで上がるものです。でないと自分のブログに書いただけと同じになります。査読は大変なサービスだけれども、それが論文の価値を維持し、科学技術の世界を維持する上にとても重要と思っています。
- 私が投稿する論文のすべては、査読者を推薦することになっている。ただ、編集委員がそれを採用するかどうかは、投稿者にはわからないことになっている。なので、問１０の質問は、適切でないと思う。また、問７も答えにくい質問である。数は少ないが、査読者には他の査読者のコメントが通知され、論文が採択されたかどうかを通知する雑誌もある。
- 査読制度は重要であるが，優れた査読員や編集委員の確保が課題である。優れた投稿論文に,「いいがかり」とも言える意見を出して，価値を台無しにする査読もある。逆に，手続きが十分と言えない論文を掲載して，それが既成事実になるのも困る。それから，20 年前くらいから，教育系の学会誌の大半がダブルブラインドになり，それが当たり前のように考えている人が増えているが，これも問題だと思う。誰が書いた論文なのかが分からないようでは，適切な査読ができるとは思えない。その投稿者の過去の研究を踏まえて，その論文の手続きの妥当性が決まる部分があるからだ。
- 商業出版社による高額な APC が発生するが、査読者はボランタリーに行われており、多くの良質な査読者を確保することが困難になっているように感じる。特に、我が国では英文誌の査読者として活躍している人材は少ない。研究時間が充分確保出来ていないためという点もあるのではないか。
- 査読は雑誌に載る論文の質を保つために必須の制度だと思う。ただ、著者も査読者も我の強い学者・研究者であるから、トラブルの温床であることも事実である。トラブル事例集を作るなどして、査読制度がよりよいものになるよう、著者、査読者、編集者を啓発して行くべきだと思う。
- 必要な制度だと思う。査読すること・査読されることを通して学ぶことは多く、研究者にとって常に必要不可欠なものだと思う。
- 一定の評価を得ている国際誌の編集者を担当して思うことは、査読を依頼しても、

引き受けない研究者が大多数であり、査読者が評価される仕組みが必要ではないかと思います。ボランティアで成り立っている査読制度について、ただ乗りしている研究者が多いことに驚いています。

- 適切な査読体制を構築し，健全に運営していくためには，学会員（＝当該コミュニティの成員）が査読の制度やその制限などについて，基本的な考え方や価値を共有していることが基本となる．つまり真の意味での「民主主義的な意思決定をしていくための社会基盤」が必須である．しかし全体に，そうした「社会，組織としての考え方」を共有する場面が減っているのか，コンセンサスを得ることが難しいと感じる場面が少なからず発生している．
- 前述しました。
- 投稿件数が増え、査読者の質を維持するのが困難になっているように感じる。
- 人文社会系の分野に理系の査読スタイルを適用することは誤りだと考える。専門分野の細分化により人文学の中でも他分野の研究成果の是非を判断することは難しい。むしろ多様な論文が発表されることが全体の研究を促進する。査読制度は「振い落とし」のためではなく、「質の向上」を目的とするものであると考える。
- とても大切な制度だと思います。質を担保するための継続的な取り組みを望みます。
- ・投稿論文や研究費申請のピアレビューは科学の重要な要素であり、全ての科学者が教育を受け、積極的に参画すべきである。
- ・一方で、ピアレビューはそれ自体完全なものではなく、プレプリントサーバをはじめとする様々な試みが進行中であることもよく知るべきである。
- ・研究費と投稿論文のピアレビューには異なる面も多く、別個の議論が必要である。
- ・投稿論文の査読の指針については、学術雑誌の出版母体（出版社や学協会）が策定や教育を行うべきである。より広い意味での査読の教育を行うのは研究教育機関の責務であろう。
- 研究の質を高めるために不可欠な制度。従って、依頼があったらできるだけ断らないようにしたいが、抱える事務作業の多さから断ることも多く、忸怩たる思い。
- 査読者の公平性に期待したい（性善説）。査読者名公表雑誌で、以前の共同研究者であり、好意的なコメントで審査結果、という経験はあります。プレプリントでの優先性の主張（？）という意義が理解できない。
- 公正、公平な査読は、学術の発展において重要であるので、学術会議においてしっかり議論すると良い。
- 現在所属大学倫理審査室室長を兼務している。学内規程で査読の公正さの確保を規定していますが、査読に関する問合せなども存在する。各種学会における査読体制が多様なために、査読で落とされた研究者からの査読不正の告発も見られる。査読に際しては、一方で査読者が当該専門分野（特に論題関係）に精通している必要があるが、他方で落とされた者からすれば査読者に研究資料やアイデアを盗まれる懸念

が存在する。研究者倫理の確立が不可欠であり、特にチャレンジングな若い研究者や有力大学外の研究者が、同分野の年長他大学研究者や有力大学の研究者によって、掲載を妨げられたりその結果就職を妨害されたと思うことがないようなシステム作りなどが肝要である。特定の学会では、特定大学（出身者を含む）の研究者が査読を独占寡占する事態も指摘されており、事後的な査読者の公表等アカウンタビリティを堅持した責任体制の整備が不可欠であると考えられる。

- 若手研究者における査読者としてのリテラシー教育も必要かもしれない。
- 査読は論文の質や公正性を担保する上で必要なものと思うが、必要以上に細かい専門的知識のチェック・検証、さらには査読者・投稿者双方の主張の対立・齟齬に拘泥するあまり、本来の趣旨から外れてしまうケースも少なくないように思われる。研究者としてのプライドのぶつけ合いという側面もあり、そうした「人間的な、あまりに人間的な」要素をいかに調整していくかが、査読制度の有意義な活用において重要な意味をもっているのではないであろうか。
- 論文の質・正しさを担保することは科学の根幹に関わることであり，このために厳正な査読制度は必要と思われる．
- 問題はあるにしても、概して不正や研究の問題点を修正する意味では、査読制度はうまく機能していると考えている。これ以上の良い方法は思いつかない。
- 査読時間をなるべく早くした方が良いと思う点があげられる。また依頼する側からすると査読をお願いした際、いつも査読を断る方は一定数いて、お願いする方が決まってきてしまう。査読するメリットが伝わっていないのか残念に思うことがある。
- 査読における迅速化と厳密化は，時として相反する場合がある．迅速さは投稿者にとって有益である一方，査読の精度が低下すると掲載された論文の質の低下につながる．査読者の置かれた環境での査読に費やす時間的な問題もさることながら，査読者の質向上も強く求められる．今後は，人材活用の枠組を拡げることと，ボランティア的な査読システムの一部報酬化の導入等も検討の余地があると考える．
- 海外の一部学術誌出版社が日本の大きな税金を収入源としていることに対して，英語をベースとした日本の研究者が引用できる我が国独自の論文掲載プラットフォームの必要性を感じる．
- 査読の重要性は理解しているが、その負担についても考慮すべき時期に来ていると思われます。負担の分散（公平な分担）と適正な謝礼等の仕組みを考案すべきではないでしょうか。
- 査読制度は必要だと思うが、著名な研究者の研究成果を覆すような研究は採択されにくい、ダブルブラインドで著者を査読者に明かさなくても特定できてしまい査読者の知人や著名な研究者、有名大学の卒業生等が有利になったり人種や性別による差別が生じたりする、等の多くの問題点があり、トップジャーナルに掲載された論文でも質の低いものもあり、質の高い論文がなかなか査読誌に採択されないことも

あると感じている。

- 査読が頻繁に依頼されることによる一部の査読者への負担は何らかの査読者への”報酬”（金銭的なものでなくていいと思います）を考えていい時期に来ていると思います。また、投稿者が希望すればダブルブラインドにすることが必要だと思います。
- 最近、査読者の質が低下していると感じる。
- 学術の国際化が進む中で査読制度の充実、査読者のレベル向上が必須であるが、査読者へのフィードバック、キャリア向上に生かせる工夫も必要。
- 文系の学術雑誌では、編集委員会が学会の第一線の研究者に執筆を依頼することがある（「依頼論文」などと呼ばれる）。いわば「招待投稿」であり、おそらく編集委員はチェックするだろうが、通常の投稿論文の査読制度は通らない。これが形式的には「査読なし」となってしまい、「査読あり」の一般投稿論文よりも低く見られてしまうのは文系の実態に合わない。学振などの業績に「招待講演」があるのであれば、査読の有無とは別に「招待執筆」または「依頼論文」というカテゴリーを設けるべきだと考える。
- 狭い分野だと、どうしても著者に近い人が査読者候補になってしまう。
- 私の研究する法学分野では査読が一般に行われていないので、査読を必要とする制度趣旨や、様々な査読の手続について知らない。理系が査読を必要とするのは文系とは異なる事情があるのだろうか。法学分野では必要な論文を読み、中身が読む（あるいは引用する）に値するものかどうかは各自が判断して引用する。掲載雑誌によっては、審査される場合もある。たとえ審査されないで公表された著作であっても中身を重視する。
- 雑誌のクオリティを維持する上では査読制度は必要。その一方で、査読者の立場から考えると、査読は負担である。知り合いの編集者によると、査読者を探すことが困難であるそうである。
- 経済学と環境学の両方で査読を受けた経験があるが，経済学では査読期間が非常に長い傾向にあるが，専門に合致した査読者によるコメントが得られることが多い。逆に環境学では査読期間は短いが，専門外の査読者に当たることが多い。このため，査読制度の課題は分野によって大きく異なると思われる。
- pseudoscience の蔓延を防ぐために必要だと思う。
- 査読制度は必要であることは間違いないが、各学術団体の編集委員や査読委員の負担は大きい。先進の情報通信技術を活用して、適切に迅速に効率的に行うしくみを構築する必要があるように思う。
- 研究分野が専門化しているために、どうしても仲間内で査読される傾向にある。公平な査読者もいる一方、意地悪に落とす場合や、仲間同士で簡単に採択していると思われる場合もある。結局は、研究者（査読者）自身のモラルに頼るしかない。
- 海外の雑誌では査読制度があるといいつつ、殆ど形ばかりという場合もあった。迅

速に掲載するが、掲載料を取っている、というようなケースもあり、投稿を見送ったこともある。

- 最近、（聞いてはいましたが）形だけの査読をして、論文の質を問わない雑誌があることを直接的な経験で知り、驚きました。多忙な中で査読するのはとても負担が大きいし、それに対応して論文の修正をするのも骨の折れることですが、研究と論文の質を保つためには続けるべき制度だと思います。編集者として、査読者を探すのが負担の大きい作業であることも知っているので、（分野が違いすぎるとか、同時に多数の依頼が来た場合などを除いて）私自身はできるだけ断らないようにしています。
- オンラインジャーナルが増加しており，発表する機会が広がっている一方で，査読の質については怪しい場合が増えていると考えられる．ジャーナルの質や正当性を研究者が判断する際の基準が必要だと考える．業績の指標として論文の数を用いるのは一般にはリスクを伴う．
- 査読は、査読者に負担を強いるものであり、なんらかのインセンティブがあるべきだと思う。具体的には謝金であったり、その有料ジャーナルをフリーで読める期間を設定するなど。すべての雑誌の査読制度をなくすことはできないし、やらない方が良いと思うが、一方で、査読なしで公開されるジャーナルは広く認められても良いように思う。ただし、しかるべく指摘があれば、しかるべくリバイスがあるべきであり、査読なしであってもそれに対して意見を述べる担当者を複数名設置し、常に内容を確認し、レベルの低いものが蔓延しないよう注意を払うべきだと思う。
- 論文査読と funding agency 審査は、学術研究コミュニティーが成立するための研究者の倫理的義務である。木を見て森をみないようなことにならないよう切望する。
- 現状の査読制度はベストではないが、そこそこ機能していると思う。ハイプロファイルジャーナルに投稿して、査読の結果、自分たちが気づいていない問題点を指摘され、間違った論文を出さずにすんだことが何回かあり、査読者に助けられたと感謝している。編集者としては、査読者のコメントが厳しすぎ、行き過ぎでは？と思っていたら、その著者の研究不正が発覚し、査読者が正しいとわかったこともあった。一方で、査読者の古い頑なな意見でリジェクトされ、消耗した経験も多く、現在のシステムには良いところも悪いところもある。eLIFE のように、査読コメントを編集者と査読者が議論して一つにまとめるのはよい方法だが、相当エフォートがかかるだろう。査読者の意見が間違っていたり極端だった場合に、もっと編集者が主体的に判断すれば、査読の問題点はかなり回避できるはずだが、自戒を込めて、査読者のいいなりになってしまう編集者が多いのではないか。
- 投稿者・組織の業績評価や社会実装のため論文採択の価値が高まっており、査読の問題点は高度化していると思う。
- "査読者は学者としての倫理に従って査読すべきだと考えています。

- 前の問にも答えましたが、査読によって、論文の質が向上した例しか経験していませんので、申し訳ないのですが、「問題点」に関する経験をお答えすることができません。"
- 編集者として感じることは、査読者の確保が年々難しくなっています。研究者に「余裕」が無くなっていることが大きいです。学会（ジャーナル）として査読者賞を授与するなど、確保に努めていますが不十分です。社会としてインセンティブが得られる体系が望まれます。
- 査読誌の性格により様々な査読のありようがあるのが現実で、それは必ずしも間違ってはいない。その一方で査読自体を学術的な権威付の一元的な基準と評価するのはおかしい。
- 内容は基本的に著者責任とし，大きな瑕疵がなければ掲載するという方針が共有されることを期待する。
- 学術誌が増えすぎ、査読者の確保が追いつかない。 / 査読の労力が報われないことが多い。 / 超大手出版社が査読者の奉仕のもとで巨額の利益をあげている。 / それでも代わりになる良い制度がなかなかない。
- 論文数の増大に比し、査読者の負担が極めて大きくなっている。編集者としては、査読者が忙しい、過大な査読を行っている等により、適切な査読者に受諾してもらうことがますます困難になっている。一方、査読者としての能力が不十分な研究者も多く、雑誌に掲載する論文の質を維持しつつ、できる限り速やかな出版が困難になる場合も多い。
- 論文の研究課題に対して十分な知識を持っている査読者を選んでほしい。
- 自身の研究の参考になると思った他国の研究者の論文について、その中に記述されている実験を何度も行ったが、全く再現しなかったことがあった。その論文は事実に基づいていたのかどうか、かなり疑問であった。そのような事例をどこかに報告して公開できると、再現しない実験を行って時間と労力を無駄にしなくなるようにできる。また、そのような疑わしい著者の論文査読をより厳しく行って、悪質な論文を排除できることにも繋がり、有意義だと思われる。
- 査読制度は研究者の善意に基づくものであり、査読にかかわる人は共通認識を持っている必要がある。そのためには、現在、85 万人に利用されている eAPRIN 教材を学ぶことが有用であると考える。eAPRIN 教材は常にバージョンアップを行っており、プレプリントサーバーの事項や偽の査読者メールを編集者に送った事例なども紹介されています。一般財団法人　公正研究推進協会＜https://www.aprin.or.jp/＞が提供している eAPRIN 教材の中の「ピア・レビュー」の項目
- AI が活用されるようになれば良い。
- 研究成果をビジネスと結びつけられやすい分野では「早いもの勝ち」という意識が強い傾向があるように思います。とりあえず全部載せて，良いものは長い年月が経

てば自然に残るという考え方も理解はできます。

- 学会の論文誌であれば学会の責任で掲載するという観点で査読は必要。一般の商業誌（Nature 等）の査読は意味がない。
- 負荷ではあるが、やはり、その分野の研究が進展するために、研究者はある程度の協力をすべきと考える。また、その際に、AI なども含めて、様々な技術進展のなか、当該分野の学会などが主導的に査読のやり方、基準などを提示し、環境の変化にあわせていくことは必要と考える。
- 査読は完全にボランティアであり、査読者が見つかりにくい。また投稿者が知り合いだと甘くなりがちである。また、査読期間が不当に長いのは、その間、投稿者はどうすることもできず、改善する必要がある。査読料の制度を取り入れたり、査読内容、査読期間などを公表すべきである。
- 人間が人間の業績を評価するため、不分明な点が残ることは致し方ないと思う。その不分明な点を可能かかぎり少なくしていくのは相互の信頼であると考える。
- ジャーナルによって、査読の質が大きく違う。査読依頼が来た場合にも、ジャーナルの方針に合わせて査読を行う。それが時間と手間のかかる査読の場合、無償のサービスとして提供することに限界がある。
- 法学分野ではまだ査読制度が一般的ではなく、そのために業績の価値が低くなってしまっているという現状はあるかもしれません。他方で、特に私の研究分野では学会における「思想的」対立が非常に激しく、感情的といえるレベルです。このような中で査読制度が導入されると、対立的な立場の研究者の論文を一切通さないという慣行がはびこることが非常に懸念されます（実際、政府の関連分野の審議会等では、特定の学派が支配するという状況になってしまっています）。
- 査読者や学会誌の編集委員を引き受けることのできる実力を持っている方々がある程度限定されるため、特定の方々に依頼が集中しがちである。結果、そうした方々が研究に従事する時間の確保を妨げる側面があることに矛盾を感じることがある。
- 法学分野では査読は一般的でないが、私自身は多くの学際研究を行っており、医学・工学・社会学などの他分野の学術雑誌に論文を投稿するなどの経験はある。このアンケートでは、問 3 で査読が一般的でないと回答すると、査読制度に関する具体的な設問が聞かれない仕組みになっているが、それは適切でないと思われる。査読論文の投稿経験があるかどうかによって具体的質問をするか否かを振り分けるべきである。なお、一般的に査読制度が機能するかについては、アカデミアに「余力」があるかどうかに依存すると考えている。近年のように研究者の学術外業務の負担があまりに大きい状況では、自分の研究のほかに他者の研究の評価をする余力はなくなり、それは業績の豊富な研究者により顕著である。査読制度を単体で考えるべきでなく、学術を支える予算・人員などの面を含め改善を図るようにすべきであると考える。

- 査読が機能するには適切な査読者の層が厚いことが必要だ。英語雑誌における査読の方が質の高い査読者にあたる可能性が高い印象を持っている。日本語での査読の質を高めるには、関係諸機関による査読に関するガイドラインや研修が必要だろう。その場合は分野によって期待されることも違うので、分野別で実施が必要である。
- 投稿論文数の圧倒的な増大から、査読者を探すことが量的に限界に近づいた。旧来のシステムは苦しい。検索が極めて楽になっている時代を鑑み、オープン化に向かうべきと考える（倫理にもとる内容や商業主義に偏るもの等のチェックは行うとして）。
- 査読制度はより公平でより透明であるべき制度にしてゆく必要があるが、昨今は若手研究者が査読を引き受けたがらない傾向があるので、査読も研究倫理上重要であることをさらに周知する必要があると思う。
- 従来は、偶然・必然を問わず、いい結果が出た研究成果が、査読過程を経て論文として公開されることが一般的であった。しかし、AI などによる論文検索が一般化する環境下では、様々な工夫をしたり、アプローチ法によって実施したにもかかわらず、結果的にいい成果が出なかった研究を評価し、これも重要な研究論文として、公開すべきと考える。理由は、これによって、多くの研究者が同様な無駄な努力をせず、研究者資源の効率的な活用につながると考えられるからである。従来はこれが公開されていないために、世界中で成果に結びつかない同様な研究活動が行われていたわけで、この状況はなくしていくべきである。
- 研究成果の速報性を重視すると、査読のない学会研究会などで発表する場合、研究会に参加して発表を視聴した参加者による内容やタイムスタンプになり得ると考えている。
- いろいろ時間制約がある中で、丁寧な査読をされる委員が多く（7 割方）、ボランティアとしてやっておられることにある種敬意を表する部分もある。
- 査読に貢献している真面目な研究者は、自分の時間を削って、当該研究分野に寄与している。業績にはならないので、査読を引き受けない研究者も多い。査読に貢献していることを評価するシステムが必要である。
- 私の関連する分野では競合する可能性のある複数の査読者で構成されているのが普通だが、速報性を重視する学術誌では単独査読者である場合もある。編集委員が適切に査読者を選択できていれば良いが、そうでない場合には、投稿者が査読結果の不適切を説明し、別の査読者を加えるようなシステムになっていると思う。
- 必要不可避ではある。ただし、新しい内容や、マイナーな研究（人文社会系や実践研究・応用研究）が査読で評価されにくいため、研究するリスクが高すぎ、取り組む若手がいなくなる。（また、研究評価が論文数に偏り過ぎている影響もあり、今流行の研究ばかりが重宝されてしまうことで、学問の発展に影響を及ぼしかねない。）　論文数以外での評価方法を学術全体で議論して頂きたい（少なくとも、分野間での格

差がある課題を明らかにしてほしい)。

- 大変重要な制度であると認識しているが、審査委員の質が重要で、質の担保の為には何らかの顕彰制度か報奨制度の公的な支援が求められると考えます。
- 査読はボランティアであるし、reject するほうが accept より負担が大きいことや、論文数もジャーナル数も増えていることを考えると、これまで通りボランティアで査読を行う体制は見直すべきではないか。
- 投稿誌によっては、「採択」「不採択」の二者択一を採っていることもある。査読後に修正する機会を与えて、早期に再投稿、再査読を可能とする仕組みがあるとよい。
- 本人も気づかない思い違いがある場合もあるので、第三者としての査読はあってしかるべきとは思うが、競争が激しい中で人選も含めて難しい状況がある。一度公刊された論文が実は剽窃などであったことが判っても、そのことを確実にクレジットし記録する十分な体制が無い状況で査読を止めることは難しいと感じているが、デジタル化が進み、公刊後に対応できる体制が築かれるのであれば、場合によっては現状の査読は不要とも考えられる。
- 学術誌の質の担保と、当該分野の研究の発展（独自性・新規性の尊重、方法の高度化、多様性の確保など）のためには、質の高い査読が必要である。
- 編集委員として実感したことですが、最近は査読してもらいたい研究者の方々(良い査読をする方々)がどんどん多忙になっていて、査読を拒否せざるを得ないケースが増えています。結果的に、分野が少し離れている人や、査読経験の少ない人、はたまた稀に不適切な人が、査読をしている現状です。このような現状を改善するために、これまではボランティアだった査読を有償のシステムにしてはどうかと思います。
- 「日本学術会議協力学術研究団体」に登録されている学会であっても，発行されている学会誌は玉石混合です。研究者の質保証の点からも，日本学術会議として，学会誌の内容のチエックをするべきだと思います。
- 査読意見が適切であり、論文の質を高めるのに非常に役立つケースも多いので、現状の査読制度の良い点を維持することが肝要だと考える。
- 査読制度は大切だと思うが、研究者のボランティアで行われるところが制度として未熟であると考える。持続性を考えると対価は必要であると考える。また、研究者が研究者を育てるシステムとして優れたものと思われるが、現在のように研究者の人数が減ってきており、研究者への様々な負荷が大きいため、見直しが必要と思われる。ただし、理想的な改善策としては研究者（給与をもらえる）を増やすことにあると考える。
- 査読前論文（プレプリント）を公開し、査読とそれに対する回答のやりとりを公開で行い、最後に最終原稿の受理までをオンライン上で一連のプロセスとして行う方法は不正が起こりにくく望ましいと思う。
- 査読制度は、互いの研究を高め合う目的で運用すべきであり、立場が異なるからと

言って査読段階で不採択意見を示すのはフェアではない。この点を熟知した上で運用すべきと考える。

- 一般に査読によって論文の質が向上することが多いので重要と思う。一方、迅速でオープンな情報発信の方法を模索する必要はあると考える。
- 査読は誤謬チェックなどミニマムの品質確保に徹すべき。査読が新たな分野開拓や新たなアプローチを阻害してはならない。研究の価値評価は査読ではなく、社会が事後的に判断すべきことがら。
- 投稿者の方が査読者よりも立場が弱い点を利用するアンフェアな査読者がそれなりにいるため、査読者ガチャになっている。そのため、近年は、論文投稿から受理までに費やすエフォートが爆増している。査読コメント対応で論文の質が上がればいいが、そうでないコメントも多いのが問題。
- エディター側からみると、査読者を探すのが物凄く難しい論文があるのも事実。査読者名を投稿者に公開する方針にすれば、上記の問題は軽減すると思うが、査読者を探すハードルも上がってしまうかもしれない。
- 査読者としては，(1)査読を依頼された雑誌のレベルを判断することが難しい，(2)他の査読者の査読の精確さがわからないため，自分自身の信念に従って査読することになる，ことが悩ましいです.
- 編集者としては，(1)査読者に雑誌のレベルを理解してもらうことが難しい，(2)期待される査読の精確さを査読者に伝えることが難しい，ことが悩ましいです.
- 改善できる点としては，「査読者の役割(責任・権限)と編集者の役割(責任・権限)」を明確化し，そのことを，編集者，査読者，投稿者に理解してもらうことだと思います.
- 査読制度は論文の質を上げるために必須である
- ChatGPT の利用があった場合の評価法について考えておくべきかと思われる。
- 査読できる研究者が限られており、査読制度は限界に達していると考えられる。研究成果の発信方法として、プレプリントも研究業績に含めるべきであると考える。
- 近年、査読に謝礼を支払う雑誌があると聞くようになりました。金銭目的の査読が行われることが、質の低い査読を増加させている可能性があるように感じられます。査読は、本来、研究者がそのプロセスの中で学ぶことのできるアカデミックボランティア活動であると思います。
- 海外の雑誌において、日本人の研究者の査読者としてのデータベース登録が中国に比べると著しく少ない。
- オープンサイエンスの活動や生成 AI の出現・利用など、学術論文の作成・公表にかかわる様々な変化が急激に起こっている中で、もう一度何を目指して論文を投稿するのか、査読を行うのか、を自身で問い直したいと思っています。また、研究者が多忙で、多量に論文が生産される現状では、査読が十分にできない状態になっている

のも問題です。このような状態では、従前のような査読制度が今の（今後の）体制にあっているか疑問に感じます。査読制度そのものも将来変わらざるを得ないかもしれないと思っております。

- 編集を担当すると査読者をみつけることがいかに困難かを経験することがあります。ニュースになった推薦制度は現実的に査読者がみつからないという問題を考えるとやむを得ない部分もあると思います。また、私が知る分野では複数のうち１名が推薦されたものになるというルールが一般的で、それはすべてが敵対的な研究者のコメントにならないようにする意義もあります。
- 査読者は、時間のみならず金銭コストも負う場合がある（引用された文献を購入するなど）。学協会のメンバーならば、会員の相互の責務の一部として無償で依頼するが、会員制でないオープンな雑誌では、謝金も必要（制度化されている場合もある）。
- （前の質問の回答にも書いたがここにも記しておく）ジャーナル側が査読期間を短く設定しすぎである。査読依頼は急に来るものだし、正確公正な査読をするには（査読の質を維持するために）、査読期間は査読者が引き受ける際に決めるべきである。それが気に食わない場合は、ジャーナル側が査読依頼を引き上げれば良い。また、ジャーナル側が出版までの日数が短いことを売りにするのにも問題を感じる。いち早く結果を公表したり、学位取得のために早期の査読完了を求めたくなる気持ちはよくわかるが、研究者コミュニティ全体で、そのマインドセットを変える時期に来ているのではないか。質の低下により、学術コミュニティ全体が自滅するのではないかと危惧する。
- 査読結果の査読を行うことが重要。要するに、査読結果をそのまま投稿者に伝えるのではなく、編集委員会が査読結果に対する総合的な判断を行う役割を果たすことが重要である。また査読者の査読履歴情報を蓄積することも有効。電子投稿システムを利用することで審査員の過去の査読履歴が蓄積できるので、編集委員会として共有することで、問題のある査読者を特定できる可能性がある。
- 法学分野では国内に関する限り、査読制度はあまり利用されておらず、大学紀要に自ら投稿するか、学会誌や市販の法律雑誌に招待されて（依頼されて）寄稿するかのいずれかであることが大半です。そのため、寄稿機会の多い研究者は、それ自体が高く評価される傾向があります。このような現状は、例えば、有力な教授の下で指導を受けてきた研究者が寄稿機会に恵まれやすくなる不平等を生む面がある反面、大学紀要などの雑誌に自ら投稿して論文を発表する機会も保障されているため、大学紀要に投稿する本数の多い研究者は、もちろん論文の質にもよりますが、研究能力の高さを評価されやすくなります。しかし、専任の職を得ていない研究者の場合、自ら投稿できる機会がほとんどなく圧倒的に不利です。なお、法学分野で査読は一般的でないですが、年間の学界動向を総括する企画が各雑誌で組まれ、発表後の論文が事後に評価され得るのは、合理的な仕組みかと思います。

- 投稿者の不信感を広げないように、それぞれの学会は、その査読の方針、手順、査読期間、査読結果の含意を分かりやすく公開することが望まれる。
- 質の高い査読によって、自分の論文がより良いものになったことを何度も経験しているので、査読制度は極めて重要であると思う。一方で、最近は研究者が忙しすぎて、査読に十分な時間を使うことが難しくなっている。科学の質を保つために、査読システムをより良く機能させることが必要である。
- ボランティアベースの査読体制を健全に維持するためには、公平で、丁寧な査読をどのように適正に評価するかが課題である。
- 論文の水準を保つためには必要だが、査読者となることの負担が非常に大きいので、査読者となることの十分なインセンティブが必要だと考える。
- 査読制度は重要であると思うが、査読者とのマッチングによる影響を大きく受ける現状について、対応が必要であると考える。
- 査読への見返り（業績への追加など）があると、査読者も査読し易く、編集委員も依頼し易いと感じる。
- 査読は時間も労力もかかるので、負担が大きい。きちんと査読してくれた人に対してなにか褒賞制度のようなものが作れないかと思う。査読をきちんと行ったことが昇進や教授選の材料にできる、というのはどうでしょうか？
- 無償の奉仕を前提とするピア・レビュー制度は崩壊しつつあると感じる。ピア・レビューによる品質保証もしかり。
- 投稿者の研究の発展につながるような指摘やアドバイスの多い査読は、大変意義があると思います。そのような査読制度を維持していくためには、制度への信頼が不可欠だと思いますが、「コピペ」の氾濫や、さらに最近のＡＩの導入などにより、査読の意義や価値がどのように変化するのか不安を感じています。
- 査読方法（査読者人数も含む）、過程、難易度、学術雑誌によって違うのは当然だと思う。IUPAC の場合は、約 10 人もの査読者がおり、十分に意見をいただいた後、パブリックレビューが半年以上もある。学術雑誌の種類によって、速報性や十分なレビューなど違って当然であると思います。